

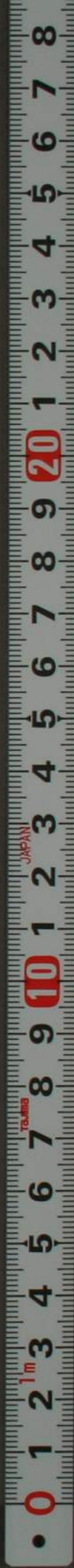


奉使日本紀行

從第六編
 至第九編

ル 2
 3052
 2

學大田稻早
 館書圖
 庫文 田內者托寄
 號一五第書托寄
 號 13 第
 册 2 第

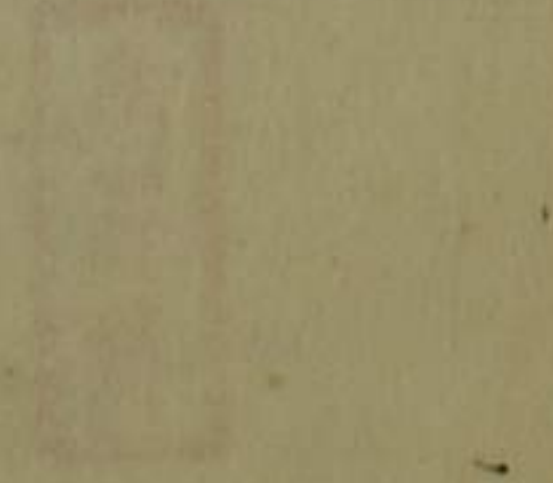
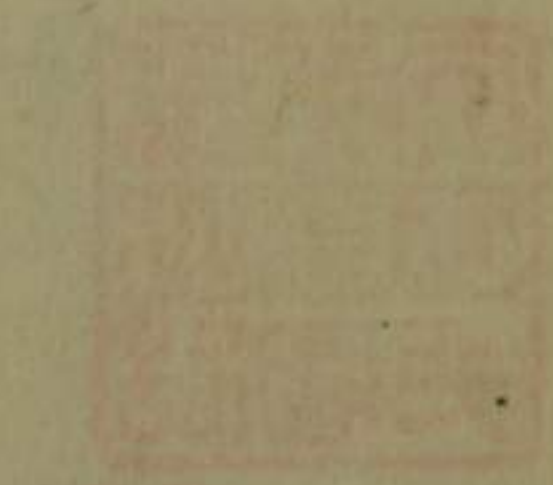


門ル呂
號 2864
卷 2

門ル 2
號 3052
卷 2

奉儀本紀行

シトナカクナキト出テトク四題の彼身三月廿日朝八時
南押と東境の松行の長遠分を分り此より大志寺
上北原 松行 寺 松行 寺 松行 寺 松行 寺
定一森源上時の中ハ内大志寺より松行寺へ
のり行高く雨より河の松行寺へ松行寺へ
三月廿日松行寺大志寺へ松行寺へ松行寺へ松行寺へ
りて松行寺大志寺へ松行寺へ松行寺へ松行寺へ
九分中北原 松行 寺 松行 寺 松行 寺 松行 寺





奉使日本紀行

第六篇 南岬の經度よりニユカイワに至る

シントカタリナと出てより四週の後三月三日朝八時子
角岬を來過し、航行の最速なる船此より凡忽ち變
して北東の船を甚く烈き非れども數日吹續き且
空ハ霧深く一時の中ハ兩度きり子ツ船と見え候こと
あり海ハ高く南より海^逆の來て船蕩揺甚く一舟
三月五日益前子大陽暫く現きドクトルホルルこれと測
りて緯五十九度五十八分とす^舟每道の算に従ハ六十度零
九分とす此度の我等ハ西風子由て至る所の極あり

大正七年九月廿四日寄
内田希子氏贈



高麗齋

時計は従い經い此大陽^高度より算して七十度十五分の
のりし弟三月七日午正に大陽を測り得て其測りて
再考すしる前の暴風よて日三十三里より十四里を南に
吹送られしより弟三月九日海上全く静みして我等
海水の^底度と測るる百尋の深きに
一度半の^底處の^底處二度半水面上よて二度四分二寸此時天
候は四度と寸又諸天頂角数を平均して羅盤の差を
視るる二十七度四十分の北東差と寸是れ我等の南緯
めて視し所の最大に差と寸船の緯は五十九度二十分
經の時計は従ひ七十二度四十五分は在

弟三月十日予算するに既しヒクトクア岬より西半度と
寸猶西に針路を取スルに岬より以來得る所の南爪を采
して唯船を西に遣るあり是れ此海上の廻帰線下は
常に西爪ありて我れ尤も意を用ひては所よて其西爪
に逢ふ時必針路を北に取へしあり今唯西の經度
にのみ船を遣りたりぬるに經度八十度に至る前より早
く北に趣くへし欲す甲比丹にブリシ此を予に示せし
に既し七十二度に至るに猶ヒールランドを采過す遂
に喜望峯に向て走りたりぬるに
弟三月十四日我船南緯五十六度十三分西徑八十二度

五十六分至る舟道算にハ 徑度八十六度二十七分
今ビルラル岬より西八度とす此岬ハラルヲテルビヨウゴの
西辺岬あり此岬を乘過るハ今の天気疑なく思
かりきと察せられ若爪を得ありハコトクノ弟二回
と弟二回の針路ハ間北西の針路を取
予又兼此は多くハ南爪を得べしと思ひ北爪起
十六日ハ北爪強くあり逆涛高く船を蕩揺せり
暴爪の時より甚くハバロメーターハ候甚く低く
續~~て~~十七日の夜ハ二十八ドイム四十五とありハ予全
航海中ハ今年弟十一月一日の外ハ此夜の如く低きハ

ありハ北西より来る高涛甚く大なり其方角ハ
俄に雲起り北西の大暴爪の来るハ船の備へを
居たり然るハ十八日ハ好天気なる全爪ありしあり前夜
ハ^殊持露の降多かりしハ露の多きハ常に陸地
近づく兆しありしあり我船の在辺ハ陸地の見ゆ
あり船ハ南緯五十五度四十六分西徑八十九度〇〇分在諸
測より平均ハ羅盤此處より十九度五十九分二十秒北
東差七十五度三十分の南傾とす
弟三月二十日朝八時我等は從ふハ既ハマヘラシ海峽
を乘過りし時何者ハヒクトリア岬ハ其海峽の北側

の西隅ありて此岬我船の東距離六百五十里に在るとすれ
あり是故に我等ハステーションランド及びイルラテルヒョウゴと
二十四日の内ニ乗過し多かり是ハ此時節の航海ハ思小
かりハ甚ハ速かりし可此處よりバロイナル再常度の高ハ
復りしなりヒヨルラドを廻ル間ハ天氣の暗雨ハ拘り
を何時も六リニイワ此ニ来る前より低くありしハ此處
より再ハ外リ路ハあり

我等ハ猶北西の針路ニ進むベイルンワルリスカルラント
ボウケンヒレコトク及び其他述時の航海者の針路ハ
後小ハ欲セシハ為かり此諸航海者ユトリの初回の途

を除てハ皆マヘラシ海峽を乗過するハ直ニ北ニ
針路を取リたり我等三日の間勁ニ南爪を得て及て
涛し起らず海の静あり内海のともありハロイナルの
高三十ドイム三リニイ我此全途中ハ稀ニ見一所ハ寸
然れども空ハたえ寸曇りたり三月二十四日終ニ暮
間の烈爪後ハ壬亥間の風ハあり涛甚ハ高く多し且霧
深く子ワ船を見失ふに至り空暗く爪あり我より合
図の石火夫を鳴りし何の應もなし是子ワ船ハ別れ
たりとの思小ハ空暗たり至て益彼ハ別れたるを
おぬかりてハニコカイワ島ハ著る前ハ互ニ逢事

あつた。推量より、此時我船の緯四十七度の九分
西徑九十七度の四分とす時計より

弟三月二十四日より同三十一日に至り多し、天気荒く
高涛起りて船を蕩揺らる事甚し。我等常に
一週を二回より船の水を汲干すして宜し。是れ今を
毎日船の水を出し、此救週の間月離を測らるる
弟三月三十日、六月を測りて得たり。此を四行せし、十二の
距を測量し、午正の測り平均して、徑度船のアルマナクに従
ハ九十九度二十一分、コノイサセ、ラス、テムスに従ハ九十九度
三十五分十五秒、ドクトルホル子の測ハ九十九度二十八分のアル

ノドの時計ハ九十九度五十五分四十五秒とす
弟四月三日、再又月離の測りて、此弟三月三十日、弟四月
三日の測時計より三十一日ハ二十四分十五秒、三日ハ二十七分十
五秒とホル子及び予カ為り測り平均数より西ありとす
思ふに時計の運行ハ緊し、常度より合り、
かゝる是初ハ暖地より出て寒地に入り、今又寒地より
漸く温あり、所より来れ、必此より動あり、是故に
我等今より、月離より測り、其徑度を捨て、新し
長く、續き、測り、時計の運行を推し、
とす諸測量の平均数より十度二十九分二十秒より八度

五十七分四十秒、至を以て今日の羅盤の差九度三十
六分四十八秒北東差とす我船、其時南緯三十八度
の二分とす

弟四月八日船の入別を問はる時予船夫の内に
之れ敗血病の候あり者ありやと吟味りし是既に
十週の間海上に在て且終の六週はたへて雨湿の氣に
逢へ故ありドクテル、エスベンベルク衆船夫を診らるる皆
コロस्ताイトに在り時より強健にして齒断の如
固く是よりたると以て亦し敗血病の患ありと證
そわく船に病者の一人しりる事あり、予また心と

幸の大ありとす、但使荒の庵人の勞瘵を患てあり
し伯西見よと予彼を諭し本国に帰らんを欲するあり
は此處より帰るに當て為し施さしと云ふも彼
帰国を欲す予強てこれを返さし及す然とも此者
一人は此處を終りて存在すると思ふれり、
此日より日に増し天氣温暖となり、予此より船夫等
みボトルを飲を禁し其代として砂糖と酢を割渡し
食時よ、茶を興へ飲しむ

弟四月十日ハシントカタリヤを出てより始ての好天氣に
して此より、天氣しむる好晴あり、予と思ひ船中

の天氣を候へば諸仕業を勤めしむるに
に著るに候へばにされしむるに
修繕せしむるに
を為す又鍛冶を命し船の鐵具を修繕し且小刀斧を作
らしめ諸島人の交易に用ひ供す舟匠に走舟小舟を
修復せしむ砲筒を夫の本位に列置しがライストル
ト止しして船夫の一分を領して替古の爲にされしむ
射習はしむ

弟四月十二日敷時の内暴爪吹夜三時忽ち南爪より敷
時の内續吹其爪赤の方より吹始免終に南東風より

船の帆を残りす張りて壬亥の間より走り夫より針路を西に
向し北西爪の吹時より船を往度九十九度迄は吹退りし
夫より南東のバツサート風を得ては好風なりしあり諸
此バツサート風の時を多しめ直にカムサツカに至りて
彼處より亞墨利加高館の品物を積入りて夫より使節
を日本へ送り至るに兼て予の預免計りありし
とし今年の内より使節の日本より至る勤向まを爲し
終るべき事なれば何者か使節を日本より
送りし六月を経し然るにカムサツカより返るに
弟五月の前より爲しすすめし我等何れ

此冬ハ日本ヲ滞留スルニ有ルハ今ナリ急ニ日本に
趣クハ要トセテ予弟六月弟七月弟八月の間ニハ猶此
大洋中を徑歴搜索スルモ亦予ノ勤ノ一トス若今ナリ
日本ニ至リ九月十月ニ滞留セシムルハ船荷ハ大半
腐敗スルハ一且我船の火酒桶ハ性宜ク然ルニ長ク
貯小申心元有ク又日本有テカク遅滞セハ亞墨利加商館
に備少ヘシ諸用ヲ滞タヘ一且亦使節の望む所ハ日本
ハ成否ヲ定メカク一トモ今先カムサツカニ急ニ
至リテ彼所ニ在リ亞墨利加商館の千代等ハ我船ニ
積多ク荷物鐵繩索等を渡シ使節モ旁リ亞墨利加

商館の總督トモ心の勤の心を先此標的と先にす
ヘ一と思ふあり
是ハ於テ予バセシ島ヲ尋め事ヲ止ミ此島ハ今
我ナリ西五百里許ニ隔テ離レ有ルアリ此二日已來爪
ハ巽或ハ辰巳間ニ既ニハツサト風を得たりと思われ
一風又艮或ハセ麥間ニ向テ吹たり予針路ヲ変シテ
ワリス或ハボウルガイシヒの針路ニ近キ方ニ向小且船夫
に命シテ不断登ハ檣ヲ升リ夜ハ頭楫ヲ出テ陸地ヲ
見出ス一但登ハナヒアステル夜ハニナヒアステルヲ初テ
見出シたる者ニ賞トスルヲ約シ弟四月十七日徑

百零四度三十分の所より南緯の廻帰線と絶
渡りぬ

弟四月十八日及び十九日の暗好ありて我等月離を測り
宜しく十八日の正午百零六度五十一分二十三秒十九日の
百零八度零四分十二秒と平均取るとす百二十八号アムスト
時の正午と百零七度二十分五十二秒十九日と百零八度二十
九分十五秒と寸之と平均取るとす百二十八号時計ハ二十
七分四十六秒と西ニ過るとす羅盤ハ十八日緯二十
二度二十分めて五度四十九分の北東差二十一日緯二十度
五十八分徑百零八度四十六分めて五度十二分の差とす

羅盤の差ハサンドライツ諸島まで全く同しく三度より
五度半の間ハ東元の差ありたりぬ
弟四月二十二日緯二十度の所の處にて北東と南東と互に
替り吹て疾風と逢ふ而して辰巳間のバツサート爪鼻
或は即ち或は弱く天気ハ何時も暗好にてワウシグト
島より至るまで替りあり吹たり曉氣ハ弥増てテルモ
メートル棚頭にて二十二度半に升り帆板上の蔭を二十
二度に升る天気續て好暗ありハ六分續て月離を
測量しワウシグト及ハメントサ島の徑度を測るす
備ふよりコーグメントサの徑度を測及ハマルサドとイル

ソンのワッシングトンの徑度の測の差を校す且此はボルダ
の表を以て算す此六日の測量の平均にて百二十八号
時計の一度三十秒の西に過るを檢すをド寸及びワ
シングトン島に於て第五月六日七日の時計の徑度算
教に此差教にこりありとす

予針路をへるキニ島 ノルウヰ島のボドレ ユフガ島 ヘルゲストの
リラウ島

の間を取て此二島を見入ると寸第五月五日の夜は
甚雨疾風を逢ふ曙はハヤハヤとあがもれとも空
曇りて月離を測る能はず 第五月五日我船ハ
南緯九度二十分西徑時計 月離の測めて
校正して のに後て百

三十七度零八分と寸次夜の帆を減してハツサト風を
走り曉に於てへるキニ島を南西五十度の方船より去る
三十五里より三十八里の間に見たり此島は高く圍大あら
ず其頂平なりて其北と南ハヤハヤと殺たり其北隅ハ
分明なりて二嶺は別をたりと見ゆ甲比丹コーク乃
図に此島の南側は教小礁島を記すとすへとも我等ハ
見て能はず然るとも其北西側ハ西側ハ或ハ高く圓々
或ハ柱の形にてあり小礁島ハ何を見ら大抵本島
と距て二百五十或ハ三百尋許と寸コークグ針路ハ
九度二十分より北なり寸此島ハ其船の庚申間に見て

此北西側に在礁を見得たりあり七時半に我等又サ
イサラア島メシダシナクドミユキミ名く是あり我等始に
此島をモタ子島即メシダシナクサレベトロと名くもの
ありと思ふ其島の東隅に我船の方位は南西に在
て其中央南西七十度三十分とすコークの記に此島
を詳しす然とも我より三十五里許の距て之を詳
しする能はず九時よ此島の東隅我船の正南に
在ホル子ル及びロウニスル暫時に大隅高度ヲ測て時表
を校し時計の差と檢し此徑度百三十八度二十一分
三十秒とす此島の西隅に我等は分明に見下能はず八時

我船成辛間に行てユアツユガ島と午中に當て見ん
欲し其緯度と差謬ありらん為とす十時よ此島に
至の方に見たり我船の正南ありへツユキ島より數分
遅くあり其徑我測よ百三十八度三十九分三十秒と
コークの測よ三十八度四十八分十八分三十秒と差へ
りとす緯度と我等の隅角高度の測に從は三分と此
ありとす大陽正午黃道交の測適よユアツユガ島上の
複峯我船の正面十八里の距に見んが正午の高度
測ハホル子ルとロウニスルに二入トロウノトとラムス
テのセキスタにて細に測て緯八度五十五分五十

八秒と寸是と以て復峯の緯度ハ此島の北方に
寄るなり南の方より在る見ゆへワキ島に正午
こハ我船の南東十八度見たり一ハ今ハこ見へ
すありぬ予船と此島と添て六七里と距り遣る海
の深常の百尋ありて底に至らず此島の東より西に
向て高く其中央ハ最高く其西側ハ峻峯あり其西
より近く之を見れば形復峯のこ見ゆあり此島
の東隅我船の成れ方ハ見一時復峯と見一消し
中央の高峯のこ見ゆ其西側ハ一柱のこ見ゆ
高く聳へ見ゆ其南側ハ二ツの湾曲あり碇泊の所と

こへ見ゆ然とも爪の標ハ頼難る一ハ此島の
西側ハ肥沃の地と見へたり何者ハ其地高しととも
東側よりハ平にして一並の嶺を有す所ハ杓礁の上
在て處ハ深き谷を狭む其並ハ嶺と見ゆ所
ハ杓礁と似て唯彼よりハ荒なるやうなり
又此西側ハ一礁島一里半許の圍あり此礁島ハ
西側の本島と間ハ平あり大石墓石の如きを置島の
西側ハ漸々低くありて端に至る高く聳へ差出
る礁ありて限らず此礁後西ハ好港とあり
見ゆれとも我等ゆれを審み見ゆ能はず我等此

島と僅の離よて見過き然し爪も強めりす然を共
濱に舟のあり島上に住人あるを見す唯所よ烟の
外々を見たり此島の東隅の我船の北に當る時よ亦先
大陽高度を測りて時刻を定め而して時計の算に從て
之を推さる徑度百三十九度の五分のつとす島の方嚮ハ
甲寅間と庚申の向りて長九里ありリュイサントベルケス
と星士コークの図とる所隨分詳ありす但其南側の
形ハ図と符合せず図する所ハ西側よ近き所よ似り
ニアビユかの中央ハ我等の側よ南緯八度五十四分
三十秒西徑百三十九度の九分三十秒とすヘルケストの

測よハ緯八度五十分三十秒徑百三十九度の九分つと
り登立時ニユカイワ島を霧の中に見たれとも其
離を測へりす六時よ唯マストセイル而已と除て諸
帆を収めてニアフユカとユカイワの間二十七里の幅あり
中も船と違る是ハヘルゲストの図よりハアウロスト
の図を詳ありし其図よ從て針路を取其路程
ハ半よ至りて差北よ寄て行よ一時を過て船の
甚し陸よ近きを見て復南よ寄て行るあり
ニアフユカの西側とユカイワの南東隅マレチンと
の距ハ唯十八里ありとす然をともヘルゲストハ二

十里としウイルリハ二十四里とす予此ニ由てアッロウス
ことしハルゲストの此諸島に徑緯の測及ひウレンクト
島の方置の説に從ひて海の所由を知らざりし彼はコック
の教示する所ありて且星学に名ある者たるなりハルゲ
ストの測ハ極て詳悉とせしめし然れどもマルカント
及ひウイルリより勝せりとすユアソユカ島の測ハヘルゲ
スト及小者ありマルカントハ全くこれを見出
しハ徒に遠く見たるものあり初めて此島を見出
したる者ハ西墨利加スインクラハム及び其土の輩
ありしとす予ハ其説を聞てハ

翌曉ハユカウ島の南東^隅に向て船を進め船の北西
十五里の距よ之を見る此時ハユアボア島の船の南
西二十四里許ハ在其島上の教峯遠く望て舊府の
高塔の並いたる如し十時ハ船ホメ湾小對す
此灣ハヘルゲストのコムソトロレル湾と名つくものなり
予此處よりユイテナントハゴロウユソと梅針役一人
として二艘の瑞舟^端に乗てマルチ岬とコムブローレル
湾の西隅の深を測しマルチ岬ハ最も突出し鋭
形ありて著しく又コムブローレル湾ハマルチ
岬の西半里ニ墨色の大礁ありと以て棟^棟とす此

湾ハ随分風ヲ防ニ宜一ト見ヨ我等船より見ヨ島人
の我輩陸ニ歩行するを見よれとも彼より船の我舟ニ
来るものあり蓋島人の舟ニ乗るものと知らずと
思フ島を距ルニ二里トシテ猶海の深く底ニ至らず
夫より進テ五十尋ありテ底ニ至る處其地の細沙
多ク又進テ濱ニ近ク猶三十五尋あり予端舟を出
シテ後船を濱ニ沿テ進メ一里の距ニ至るとして
いよこへルゲストのボルトアレナマリアト名ツク港を見出
す此濱ハ全ク直ニ礁ニテ大^夫より内地の方ニ連
山續ニ並ビ巖礁禿兀トシテ唯薄闇ニ景色ある

所ニ唯一ツの落^瀑水の見事ありあり其高少ク七十
尺許あり處より直ニ海ニ落るあり其嶺の上
四方形あり石造の室あり屋あり見ハ高し甚し
けり寸樹ニテ因ニたり予此を墓所の類あり一ト察
シぬ尔後予タトヨホア一谷を尋ねて多く墓を見たり
とし此類のありと見ヨ然とし予遂ニ之を詳ニする所
なり海濱ニ近ク時ニ礁上ニ島人多ク集リ我船を
見ると見ヘテ其辺ニ行ツ来リつゝあり
十一時ハ一艘の小船ニ島人八人乗リテ我船ニ漕来ルニ
其小船ニ白ニ旗ヲ建たり我等思小ニ白ニ旗ニ

次羅巴人の和睦を表する記号と云れ、彼船は次羅巴人の在りたる人果して其船は一人の諸厄利要人有其形状、島人のこと思ふれ、唯腰ニコルデル類と縲るを異ありとす此者共々任する西墨利加入二人を伴ひ我等に見へ、我為に薪水の用を辨せ、請ひ且自らし我為に用を達せしとあり、予彼等を兼引り而して此島の吏を探り知れ為の好通詞を得たるを悦いぬ

此諸厄利要人のロベルト名づく者にて彼が話せば七年以前より此島に住す其以前のサタリスチナニ居

と二年あり元諸厄利要船は勤めたる、其船夫等甲比丹は違背し己を味方に引入んとせしを拒む船夫等、為に島上に放たれり然るも近比島のニユカイの島主の親屬と姻と結ひ島中にて貴らる故に我等は為に用を達せりも容易ありと彼又云近比諸厄利要商船より道を來り拂郎察人ありて此島に來り住し己と甚く相悪し互に敵の思ふす此より由て此拂郎察人を島主及び去人訴へ證して彼を罪せり、人々欲すして其己と相悪むの由を述ふ此事に就て我等思ふに彼等共は次羅巴

の産物してめづる僻遠の地粗野異俗の土人み交り住ら
る若稀に政羅巴人を見らる得難き交りとして相親
睦とへき理ありと及て互に相悪と仇とらるる哀む
へき哀ありとや是を以て我等此に逗留中務て此二人の
和睦取結ふべき理害ヲ述へ此二人互に相親睦と土人
等も愈以汝等と尊敬とへき事ありと勧められ此
二人も先相和睦とへき事ありて我等の前よて互に
手を取り和睦の證とるに二所よ此諸厄利亞人側より
拂高察人の在る所よて又我も告て云らるる今やかく
和睦とらるし彼拂高察人は於てい必に誠の心非ず

何者か今より前よし彼と和睦と約とらるし遂に其詞
を尋て和睦の情とわらふ寸度ありと見らるるありとて
彼ら立ち所所の巖と指し云此巖と平に削りあるす
てい易かる一然し拂高察人をして心より誠の
和睦とあるしむる事難かるるあり

正午に我船をホルト、アコナ、マリア港の十六尋ある所よ
碇す底に細砂とクイあり島の北濱より半里東
濱より四分里の所よて「ミコトス」の島此港口の西側
より船の南西三十度、當り港口の東側とらるるマウ
タラ島に我南に當り我等の水汲み所の小川に

我より北西十一度に在り

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

奉使日本紀行

第七篇 ユカイワ島逗留

船の碇を下すと直に我百の島人我船と取囲ひ来りて椰子ブロートフリユク子バナ子の樹果を賣んと求むの四五寸に切たるを以てす此鐵箱ハ并てココンスタードよて如此用の為ニ備へたるあり椰子ハ一箇フロードフリユクトハ三四箇を以て鐵の切一ツを替り斧の類ハ彼ハ最シ望む所とすと此鐵箱の一折を彼ハ與ふハ彼ハ喜て小児の状の如く高聲を笑て其喜とありすあり彼ハ其望を得て

自ら誇りて此を奉て其他の人を賛一示す其喜
か得難き宝を得て其實に稀有の仕合ありと
云ふありとロベルツの言は彼此は啓七年の内、只兩
度五墨利加の商船の來るる而已あり

予兼てより此より豚の肉にして之を替取より斧の
類よてありこれ得難しと聞たる故予此にて諸食
物を買入んと欲しこれ著るると直に船
中の人より令して敢て土人の珍異の品を交易する
を禁して唯糧食の品を買入んとしてリユイラサント
ロムベルクとドクトル、エスゴベルグとを以て此地よての

交易の事を指揮せしめ主として糧食とすべき物を
買入ると既にして椰子の類は多く買入るとは豚
得べき事難きを知り夫より前より出せし禁令
を免して人々をして自由にして此所の珍らしき品と
替取し

昼の四時島主自ら其従者を従へて船に來る其名
をタベカクテノウエトシ其顔壯大丹して首筋太く
四十歳ヲ四十五歳をかりと見へ色若人と黒く頭髮
は切らりと見へたり是島の王あるとし其従者も
巾着は差別あり見ゆ只ニレヤホ

帯の如き物の名此ラ
腰に纏ふサドイ島

よて此を腰に纏へるるがかりにて衣服好く全く
裸あり予彼を棚頂に併い彼に小刀と赤き木綿
二十疋あるを贈りしに彼直に其赤布を腰に
纏いけり其後者ありりの多くに此主の親屬
あり由る此等も少く贈りのをあふし口へ
以傍より之を見て予を制し多く贈りあふら
る無益あるを告て之此等の人島主たりとし
少く報禮をせりといひ知りすとあり予島主
として我船の大砲並に大砲の枚多あるを見
て一免且彼を諭して云我此を以て此島人を威す

るるあり故に彼に島人を命じて我を敵する事と
ありしむへりすと扱予初免此島主もサントイク
島及びタセルカフ島の主のて勢ありしと思ふ
に其てありしを彼船板の上に来りて其
刃を置たり伯西見産の小鸚鵡を見て大に驚き喜ひ
暫の間其側にてあり居り予彼之を望む意
を察して其一箇を彼に贈りて予にロベル此
を甚く過るる贈物ありと思ひて彼に贈りたる
といふすして翌日其替物として豚一頭を我方に
送り越せりあり

日既頃、多る比、船々来る諸男共、皆返りし
に衆多の婦女、船の近き、纏居、此等、既、五
時前より、船の周囲に遊り廻り、其女共種々の
手術をありて、船を招き、衆人、小意を示しぬ、是、彼
男共、容顔し、彼女等、船を上る事と許し、多る、気色
あり、を以て、必ず、我船を来んと欲して、かく、此所を
去り、去りあり、然、是、我船上の諸事、おもしろい
婦女の午を借り、すして、幸足、去りとす、ぬ、予、即ち、言
を、出して、凡、島主の親眷の外、男子も、女子も、船を
来らしむ、へ、す、と、令、せ、し、既、黄昏とあり

彼女等、歎き、願ひて、船を、外ら、し、め、よ、と、頻り、し、請ふ
予、し、思慮、して、終、よ、之、を、許、した、り、予、初め、思、ふ
此等の女と、船を、招、ひ、我、船、夫、を、黴、毒、を、傳、染、さ、る、の
恐、あり、と、案、せ、し、ゴ、ロ、ヘ、ル、ウ、云、此、地、は、今、に、至、て、黴、毒、の
患、あり、と、あり、予、少、く、船、夫、等、の、為、に、緩、裕、を
用、ひ、て、之、を、許、した、り、然、是、も、兩、日、を、限、り、て、後、に、我
此、に、逗留、中、再、し、婦、女、を、船、を、招、く、事、を、禁、し、ぬ、然、是、
と、し、尔、後、も、女、共、に、衆、多、タ、し、**果**、を、い、船、の、近、く
に、遊、り、衆、り、て、去、り、故、に、終、よ、に、彼、等、の、頭、の、上、に
鳥、銃、を、放、鳴、し、て、去、れ、を、懼、し、去、ら、し、め、たり、借、り、此

地の婦女は、かゝる淫行を耻すべし其性の輕薄放淫なる而已、閑まゝあり、是れ其夫とあり、父とあり、者情義をたす、其婦女にして強て淫を賣て、鐵器等の物を貪り、求むるを其俗とするあり、予嘗て見らば、一男子を、娘と見ゆ、十歳、十二歳の許の女子と、船の傍に游泳せしめ之を、淫戯を求むる予驚き、あつ、かゝる小兒の、其習は、い、娼妓の爪情にて、人よ媚と求めたる、幸にけし者、の如く、振舞ふる、實に驚へく、又其不幸を憐へ、事あり、而して、彼、容止、全く小兒よ

して、突嬉し、少し、かゝる憂は、い、のあり、を酒を、意、哀し、したる、やうすし、わづらひ、あり、予、實に、宇宙の間、かゝる、不幸の生を得、ものし、あり、と嘆息し、たり

次日、六時、島人百餘、船を來りて、椰子等の物を、賣る、此日、島主の諸眷屬、來りて、船を見る、と、既、七時、船を來る、予、彼等と、棚頂を、入ら、各へ、贈物を、分配し、ぬ、棚頂中、予、妻の画像を、懸置、たるを、彼等、目と、放さず、見て、驚き、たり、あり、と、あり、し、の、頭髮と、縮め、あり、と、美し、美し、と、ねり

硝子鏡し彼等を見て驚くことの^{一ツあり}皆
鏡の裏と裏の見て何故も影の写るを知らんと思
し愚あり大あり鏡の彼等の全體を写し
たりい尤もあらし皆其前より立て鑑こ
驚き其中にも島主自ら己の形體を写し見
甚悦たり其後我棚頂より訪い来る者ハ尽く
大鏡の前より立居て去らす常は此の爲の時を費し
予も甚くうれし困りとあせりあり

茲より陸より島主を報禮し且好水と尋求む
へし爲あれし予船は不在の間ハ島人と船を入へ

かき好印として赤い旗を建て一砲を響しぬ

かくしれい船ハ夕次篇小 畏丹コリ記行ハ記スボ

諸の交易事し直は正免よりありかくて船は是

外より来る人あり然し船の周囲に遊ぶ者ハ漸く遠

かりぬ十時より陸へ趣く使節並に諸司大半を伴ひ

既より島主と和睦せる夏あれし行装し平和と主し

但始の上陸は島主の住居を訪ふあれし隨分武具具を

備へ予より供廻り六人の外別は小舟一艘と具し櫓二

皆ヒストール小銃と銃と銃と供し諸官司し尽く武器を

帯し諸厄利亞人と拂郎察人と通詞として上陸

すく濱よ、土人夥しく集り見物寸陸より上り
歩む。大暑熱地雑りし彼土人の群衆の中より
島主も其眷属も在り、土人等自ら敬ひ謹み
多の體も見へたり。我等水を求め試し、甚く良
性あり。夫より島主の家に至り、凡五百歩許あり
て島主の伯父即其養父あり者の處に至りて彼
も見ゆ。彼は七十五歳の^老死翁あり、甚く強健
て眼彩爽やかにて勇壯の男と見へ其壯年の強將
なり。一戦あり、一服も創と被りたり。今も其處
猶帯と著たり。彼平に長き棒と持て、我等も

從小衆多の者を止めんとす。然るも、
あし為す所あり。老翁予と予を取りて、予と導く。一つの
長き家の中、行此處、島主の母及び諸眷親の居處
あり。彼等我を見て夫より其間^間を越ると島主も
逢ふ。島主甚く懇意の極あり。我等も來訪と
悦び此處、島主の住處と見へ島主ハターボありと
其下輩の者共、此内に入り、皆此處にて坐
す。島主の婦女等の中央に居て、人々替に予と予
を取予の衣服及其縫帽杯を見て、後其手と放
てり。此諸婦女の容止も予彼等も厚意ありと恭

とたり小川情あり予固より彼等も指環小刀鉄刀
等の細瑣の品を贈りぬ然れども彼等其贈物を
喜ぶより唯我等と親しく相見らるる悦ぶやう
あり島主の女子二十四歳あり甚く美しく次羅巴
人よし耻す心容止ま見へ黄色の衣を着し頭ハ
黒く髪を飾る椰子油を塗る但惣體ハ
黄色の衣を掩ひて唯干先ケと彫文

しつゝありあり

前の室より我等暫く休息し後島主又我等と
伴ひ十五歩許離れし一室に至る此處ハ島主の

親眷の集り居る處あり次希島主家室
の構築を詳よ其處より我等

は食を饗す昂ら其所ハ薦を延敷て我等の坐し

初め椰子次ハナ子三ハ水と供し彼給仕の者

とし我等の傍に居て扇で冷しぬめり我等を饗する

ハ彼の方よし甚く喜ぶすり度ありと半時許り

我等共饗を受て夫より彼等と相辞して別を返す

島主と其養父と共し我等を送りて初めて相見

處に至り夫多し主人出て我等を回繞し我等

前後ハ被從者三人ハ武器を帯して警固し

正午に船を返りぬ船を返ると直に空桶を小船に

載て水を汲み遣りたる三時を過て水を取来りぬ
此水を汲入るも土人甚く能く我等が為り力を尽し
勢一水桶を取て水を游り暑熱の~~中~~を厭はず働
りり故より日ニ水を汲取る我船夫の辛勞を省り日
小船を三四回々往来せしめ全く土人の力あるを
~~際~~せしあり土人の方へ報せらる一回に彼古鐵箱五寸
許あるを十二箇々遣りしあり
我等力を費し豚を買入んとす是より三日の内
唯二頭ヲ得其一鴨鵝の返禮を~~し~~得又一の斧を
替へる而已故に此に在ても海上に在る同く

新鮮の食を乏しく唯椰子を以て生鮮とするの
外にやぐり塩肉を用いしあり但し椰子は船中
周く用る程買入各々して之を飽しむ
弟五月十日の夕に海上に三橋の大船見ゆるの注進を
得たり予此船は子りありへしと思ひ直に小船を
一司を乗せて案内として此港を導くへしと遣り
りるに子り船は未だ海上遠くよありて其小船は彼
逢いすして返りぬ是より於て翌朝ユイテナント、コロワ
ツコフを遣て子りを導ししめ正午の比子り船を引て港に
入来るに絶て爪あがりりぬは予引船を命して彼を

取け午後五時、漸く吾船に近く来り碇す甲比丹
リヤンスコイ予を告て言彼船ハバース島にて發
我船を逢べし哉と待合せしむ
十二日午後五時予甲比丹リヤンスコイの方より往
ありしニユカイワの土人騒乱を起し島主と我船
と繋ぎ置しあり船を討ておらんとするは
子り船の小船の陸の方より往し者より之を注進し
其小船を陸よて既は危き所を幸して道を返りたり
と陸にてお騒乱する中にも諸厄利無入ロヘルツ人
土人を制し止むしつゝ多勢を對し彼も甚く

危きありと其小船を来り往しつゝ一司より告ける
予之を聞て何れ故は其騒乱を起したるや心得ず
予只今少し前こそ我船を離れし島主も僅か半時
前まで我船に來り居り朝の中ハ船上に在り少し
も怪しむ氣色あり我より贈りし物を受く
悦ぶのこあり寸且予彼を香水と与へて繋ぎ割しの
たるを殊の外に喜ひしつゝ思ひ予直に我船を
返りて我船中にて島主を怒ししめしありやと
尋せし然るこもあり疑ふらくハ島主の偽りて
此沙汰とありしむらわ然るこも是し左にあらず

予是に於て疑へるに、拂郎察人の我等に親むに
諳厄利臣人の如くあり、寸彼之を妬みて、其奸謀を
設て彼利を得んと計るものあり、人々と察せしむ
果して彼より起りし、莫と見へたり、其莫は始免
午時、我等食卓に在り、時我船の當番の一司予に
告り、島の主陸に返りて、僅に一時を過て、彼復
拂郎察人と別れ、豚を引たる一人を伴ひ、船を來る
と予之を聞て、十分時後、舳板上に至るに、豚を牽たる
者、既に船より引返り、往たり、是は彼を直に、鸚鵡
と與へし、故ありと、予大に驚き、島主を請て

彼豚を牽たるもの、甚く短氣あり、者あり、彼を呼
返し、兵よりいふ、彼者の島の命に聞入り、して速
陸に向て漕返し、われ島の主の、從者我船上に來り
居る者、忽ち海中に飛入て、彼を船を追て、遊り、ゆめ
此時、拂郎察人予の傍に在て、告く、云、彼遊く者、彼者
を呼返し、往たりありと、然とも、後、聞は、われに
拂郎察人の偽計、よて、彼遊く者、して、陸に往て、土人
等、告て、云、む、我船にて、島を鎖し、繫
置んとする、故、速に、土人、來り、救へ、と、欺り、遣り
あり、と、此、由て、土人、騒動、せ、あり、拂郎察人

かく偽計ヲ以て島主は忠ある者の如く思ひまん
とせしとのあり予拂郎察人の我り為し害あるに
企て起せしと思^怨るるといふも予殊更に意よとつり
小事と見ゆりたるりかて島主は我船に留り
居る度猶一時計として意とけたる様子にて陸に
返りゆりり彼島主と我船を繋ぐといふ沙汰陸に
漸くは松りたる故に衆人皆武器を帯して騒動し
子り船の便船に其騒動を逢て辛して海濱より
道を返りぬ然るとも島主既に陸に返りあるれば
土人等も島主は故障あるを見て少くは案堵の

思ふありし暇れども島主は此沙汰を聞且拂郎察
人の欺き驚きん我等と怨り意あるは非ず
是に於て予次日陸に上て島主と訪ひ我等は彼に
對して敵する心を澄し前日島主の弟ある
者嘗て予に問て云汝は亞墨利加船のて島主
の親族と船の質と一報^執を繋ぎ置くと為す也
と予答て云汝方より我等に對し親に交る間
我等は決して少くも汝等と怨むからず事
ありすとつりしを申明しぬ

(注)此亞墨利加人今より八月前此に來りたり

次朝八時よりリヤンスコイを伴ひ我等陸より趣きしる。
二十人の兵卒と具し我等共二十人にて武器を
帶し二艘の便船各「タライイバス」石大夫の百二十八銭丸
を装する者二挺を載せ二人の隊首二十八人の卒
を引率して後しめ若被土人等我を敵對せし全島
を打挫へし勢を見しぬ借我等既に濱涯に著せ
し濱邊に一人の土人を見へす元より前夜の海濱
處に火先見へたる朝ありて我船椰子
を賣る來る者しかりありぬ心やうすあれ
我等意は油断をかす直に島主の住處海濱

より諸厄利亞里計谷に入る所に向て行し其路に
椰子フロトトフリユクト「マイヨ」樹の林ありて其下は
草生て人の膝を及ひ歩行を妨ぐ終に一條の大
浴に出つ夫より又後を山きて限りたる好景は
地畫り如く奇麗あり處に至るは椰樹ブロート
フリユクト樹等の喬木七八十尺あり生繁り處に
は隆起の地ありて其間を縦横に山より落る小
川の氷疾く流あり又瀑布あり可なりあり漸
く島主の住處に近くタロタルテル名蔬のふり
ベシイ名の園叢白木の籬にて囲む甚し

美麗に見ゆ

(注)此籬は作る樹ハニカイウ入ハウと名く樹
みて杖を以て色白く輕し

我等が僻遠の地異怪の土人ニ接するも此好
景を觀して暫く旅中の憂を散する思ふありた
りわけて島主ハ其住所より數百歩出て我等を
迎へ甚小悦び我等を礼し夫より住處ニ入るに
彼の親眷集りて相歡ひ各我等より贈る物を得
て厚く悦ぶ事有り予此時島主ニ
問て言わく相睦するハ互の歡あるニ何の故ニ

偽りの取沙汰を起し血を見るの危を告げんと
するより一戦あり汝ハ利ありと云る事あり
らんやと島主答て云我ハ固より公等ハ我を害
する意ありと云これとも彼佛郎察人予ニ告て
隙を送らざる時我を鎖にて繋ぎ留んとす
と言聞きたるありと予是に於て佛郎察人の偽
計ありと覺ふ事ありぬ予島主及ハ諸親眷ニ猶贈
物を多く與へ島主をして亦後我等ニ對し敵す
る事あり和親する事と約しわかれし
我等島主の室にて暫く休息し椰子乳を飲夫ニ

リロベルツを案内してモウイの墓所を見せし
む其前より島主の小女を逢ふ此小女は島主家
の諸児と同しく今此を神のまゝ尊ぶ者にて其
室の一處の別の構へありて此より其母及び親
屬の外に入へずすこし此より夕ボ前の室
とすあり其所を見るより島主の弱弟八月の十
月許の小児を抱きあり予傍人に向て小児は母
の乳を吞み幾許の間ありわたり人答ふ大抵母は
其児を乳するまじく見産を出ると直に此を母
より離し其他の室に携へ往て之より養ふ小女乳を

ふへす果實及び生魚を以て養ふあり然とも
ニユカイワ人の總て形大にして強健ありあり
モウイは往く路に諸種泉ありモウイは高山に上
りて大陽方の天頂に在て我等甚く辛苦して山
に登りぬモウイは深林中より一臺櫃を載せ
其櫃中に屍の天頂を僅にありしあり其周囲
に木像有人形を像るとりし甚く拙く彫物
あり其傍に一本の柱ありて椰葉及び木綿を掛
て白く見ゆ我等此柱は何を表すものと問ふに
人之を委しく答へ寸唯此は夕ボありと云モウイ

の近きよ一衆僧の位にあり此モライハ彼も属
する者ありと聞く凡人々各自らモライありロ
ベルツも島主の姻属ありハ已りモライありと
然ともモライハ多く深く内地の山もあり我等
ハ唯海濱より遠かりコト多し至り見こるあり
トクテハ予ハコトス彼モライと図写し我等も
りも船に返らんを欲すハ我等も甚く勤まら
しむるロベルツの家を訪ふハ止むへく寸
として彼の家に至り其家ハ一處椰樹林中に
在て一側ハ小川又一側ハ礁にて其中央ハ良

泉あり我等其家の周囲を繞り見て小川の濱か
ら一礁上椰樹の蔭にて休息したり今日ハ炎熱
中ニ歩行ハ勞れ甚し然るも傍ら椰樹にて二
十許の上人働々椰子を採り洗ひ我等も饗食す
ハ椰子の核をて飢を療ハ椰乳をて渴を療ハ甚
ハ清爽を覺ハロベルツの婦ハ十八歳あるハ少女
よて其容も少ハ上人の風を替り改羅巴風を
似て髪ハ椰油を塗らすあり椰油ハ甚ハ光
澤ありとも又強ハ香氣ありて髪を塗て好とセ
ハ好あり

夕一時に我等船を返り至るに今日島主を訪ひ
多の度早く土人等が知をとりて見へ以前のよ
く濱辺にも多く土人等出居り我船を返を待て
又前のよく衆人來りて土物を交易せり
五月十一日予りユイテナント、ローラニスラルニ
遣てニカインワの南濱及タイヨホア灣の西側を
見分せしむるに彼タイヨホア灣より三里を去て
一の港を見出し予り告ぐ此より由て五月十五日
予甲比丹リシヤニコイ、リユイテナント、ローラ
ニスコイ、ヘトレシテニス及ヒラレグスドルフと

子ワの一司を伴ひ小舟二艘にて其処を往て之
を見んと欲す予其處にて食糧の入用百人もの
備を命じ又諸交易の品並に贈賂の物をも携へ
行く一時行の後朝十時其海湾を著し其灣口
の深二十尋底に砂とケレイを交り其灣口の西
側は直に聳峙り礁高く立て秀々れども好形勢
あり灣内の東側は又一曲灣あり礁石を散布し
時々そく西面は全く閑き懸浪甚く大あり此多
礁の灣の西隅を過ると東の方より閑く好港あり
極て好き舟繫りと思つる其方嚮は北東と南

西より長二百尋幅百尋ありて其深きの終り
く平あり沙濱あり其後の方き昔より原あり諸厄
利亞国の好音野青野比寸へー又救可山より落
る清泉の濱に流せ出るあり後の緑野に流せ落
り此外湾の内は清水ありて一町居住すへー谷
中は流るあり其谷と土人シケキユアと名く其處
よて一の渚と名て夫より湾中に流入る然共
此湾曲ハ爪を屏障とす現に其濱涯懸浪の甚い
一と難と寸但予考ふハ満潮ハ大ありさ
る船ハ彼渚までしか衆入へー此まで水を汲まハ

甚い容易ありて入船と懸浪の間は碇して土人
前のところ甚い僅あり値よて水桶と満しむるの
みあり寸猶此と懸浪の中を遊櫂へり
此港ハ地方とて田に大爪よし其水僅に盪揺謀寸
るのこ若船を修覆とんとすりよハ此港を最好
とす其東濱より五十尋許に濱涯の水十尺或十
二尺より五尋十尋の深き至る故に船の荷を卸
すに容易き為へく又修覆を要せぬ船も前の湾
曲よりハ此港を好とすへー此處にも椰子バナー
子ハフロードフリユグテハ懸しあり但血食類

ハタイヨホアのよりより見の又此港ハ航海
者の為ハ大あり利ありと寸其故ハ陸より百
尋の離て島主及ハ工人の住する谷ハ船の大
砲間の届く所と寸土人の方より襲かハ所と制
するハ是なるハ是故ハ此港よてハタイヨホアの
より半里の隔あるハ便船と陸ハ遣り毎ハ警固
の兵と備するハ要と寸且タイヨホアの濱ハ總て
泥沼と大石ハして良地氣を得んと欲するハ
深ク陸ハ入ハありこれハ能ハすと又其地方ハ
旅館と置ハハ好ハ處あり測量所と建ハハ懸

浪とて器と損寸ハあり然れども新港ハ之ハ
及て濱ハ近ク緑野ありて測量所ハも旅館ハも
好ハ處とし渚の辺ありハチキユア谷ハ最好の道
違場とすハ若土人より襲てありハ船ハ陸
ハ近ク碇する時ハチキユアの路筋緑野の方ハ
北濱の礁地の方ハ山路の方ありハ明ハ見あ
らり寸ハ唯此港ハ不足とすハ其港口狭ク
最狭の所ハ只百二十尋あり而已併港口狭ハ
ハハハ船の為ハ危かり寸港口の十五尋或二
十尋の深ハ至て爪ハ強かりこれハ直ハ碇と

投する^事変母^事と寸タヨホア灣よりハ船の出入も投
碇を用す

投碇ハ河或ハ港ハ船ヲ出入スルハ投碇ヲ小船ヲ
持行テ之ヲ投一^次碇細^クテ繫キ回^レ之ヲ
揚ルハ船の轉^レ轎^ニテ卷^クアリ

上人此港ハ別ニ名ヲ設ケ寸唯其住^ル所の谷ヲ名^ケテ
シケキニアト^ス而已予航海の勤の嘗^ト一^テ此^トホ^レ
ト、子シムツアゴフ^ト名^ク此港ハ南緯八度五十七分〇〇
西徑百三十九度四十二分十五秒寸
タヨホア地方島主の住處並ニロベルワの住處の景色ハ

随分好^シト^スルも予此シケキニアを猶勝^セリ寸彼
地の渚ハ高嶺の麓^ニ在^テ其地傾^テ其流疾^ク其
地方を清潔^ニ寸渚の左濱^ニエ人の住處ありて其
構築タヨホカ^ニ見^レルも好^シ其エ人も彼處より
ハ勝^テ見^ル又其所^ニタヨ根^ルベ^シの國あり是ハ
此所の富^クトみ^ハ又豚^も多^クありたれとも甚^ニ
貴重^ス寸見^ハ我等^ハ一頭^も賣^寸此谷
の主ハバウチレグ^ト名^ク衆人よりハ大高^ク見^ハ
たり此ハ我等^ハ一豚^を賣^興へ^ハ然^レとも彼も
其賊^ト寸離^寸事^ト寸彼我^ハ我等^ト交易^ス

賊を出して終に彼は利多しとて又怒ち後悔
して我より換取たる品如何にも彼は好むといへ
とも是を返して元の物と已に取返すあり彼は頑はし
て決断ある誠を我を困らすも我等は猶彼を棄
す可はず彼は少々の贈物と云へりあり今度
我等は此を来りたるは彼方にて一圓を歡とす
一歐邏巴人の此に至るは我等と初とするも彼等
我を對して少くも不敬害心あるが故我等は無難
を祝し^なりバナ子に及びブロードフリユラを交易
するは古く鉄箱の折たるを以てす此谷の婦人の

メヨホアの女は異にして皆好む衣を著其衣は黄色の
長き衣にして頭は白く物にて巻くと此近隣の人々
別とす但椰子油を身に塗て光澤ありと羨しす
と見ゆ何者か初我ホルトナシテワアゴリの濱にて見
し女共いその如く油を塗てありすと見し一ヶ原
後シケギニアに至る時彼等皆飾りたりと見へ
て甚く光澤を見へりあり其柔婉ありといひタヨ
ホアの婦女より少くも見へ彼等持て異邦の賓
客と親近を見人と欲する故に害羞のやうすは
此の爲に減せりありと一此谷主の位所より教

百歩之離を大あり平あり場ありて其處は長百
尋許高一尺許の石を置たる臺あり其礎の細工の
精巧あり改羅巴の工人は耻する巧あり如此もの
タヨホアコに見るる呂ありとロベルツは向ふ此の
祭日又涌の時は見物人の居る場所ありと
晝後四時は我等船を返らんとするも向ふ爪まで
漸く夕の八時は船を返りぬトクトル、チレウスとラ
グストルツハロベルツを案内者として陸地を往り
其路は高山ありて辛苦して之を越へ終夜道を
往て翌日は至て船を返り来る

十六日には船を備る水薪全く積入を終り十七日
曉は予第一の礎を揚八時は第二の礎を揚し
此港は高山の間を在て不断爪の替り吹く故に
出帆は甚し六ヶ敷礎揚の場遠く暑熱甚しく
其働は尤難儀あり然し此時は爪は續て陸の方
より吹出し既に海湾の半に至るも爪は替りて
船の嚮方を変へ且海潮にて次第は西の方へ船
を漾せ遣りしる故に止まると得ず海湾の西側
より百二十尋を離て礎を下しぬ其濱は近
く所も深二十尋ありの濱は近し船の為

危しとす然るに忽ち逆爪吹て小碇にて港へ
かす寸とす第二の碇を下して海湾の中央に船
を出しぬ子ッ船も爪の替り吹くも應じて辛苦
我船の湾と出んとすの時も陸より遠く離れ
所にて碇を入たりわけて晝四時我船再び湾
の中央に出て爪順あり直に諸帆を張て大洋
に出んとす爪又変じて終に再び碇を下す
よ及ふ今朝四時より船夫等絶へ寸働き熱は二
十三度の強あり彼等の瘦方甚し予此
夜の此に在りて休息す一と定めり夕八時

より爪出て終夜吹れ翌曉に海と出離きり
然るに此日の昨日より天気悪しく爪忽ち強く忽ち
止て雨と催しぬ拂島寮人ヨヒカヘトは昨夜より
我船に來り居て返られ我等此天気よていけり
たけ速に陸地と遠く離れんと欲し彼とも共に連れ行
みカヘト此に憂るより喜色見へて予彼ら我等
と共に彼地と離れんと志ありと知りロベルは是
めて計ら寸も彼仇敵を免れしあり
予此次に我船の行所を記す前も猶ウシングト
諸島の方置及其爪と記す是に予ニユカイワ島

逗留する十日許にて其地方の説と其處に在る
二人の政選巴人の助にて聞集めたり事多し其
此記と載するも無益と見これりあり

此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり
此記と載するも無益と見これりあり

奉使日本紀行

第八篇ワシントン諸島記

ワシントン諸島ハ千七百九十一年寛政三年五月甲比丹

グラハムある者ホスト北亞墨利加新諸
厄利亞國の府港の商船ホーベ船名にて

メントサ諸島南亞墨利
加の諸島より北亞墨利加の北西濱に向ふ

時を始て之を見出—尔後救廻を過す—拂昂察

のレリリ船の甲比丹セルカントも此に至り其後レリ

ーワある者之を記す此セルカントハ自ら此諸島の各

見の初として此内の一島より上陸—マルカント島と名け

此を拂昂察國の所屬—名くらり—其他此に在る

諸島と尋杯皆夫こよ名とあふ然とし其東ある
ニアホカ島とい見出さす唯總て諸島とデラ、コホリユ
チヨシ諸島と名く此次年、諸厄利亞マリ子船のリエイ
テヤントヘルゲストある者名高きハコウヘルの航海の
助として其運漕船を主として千七百九十二年 寛政四
年 弟三月、此諸島と見出し之を審こしニエカイカ島
の南側より二ツの灣港と見出し小船を其内の一島に
送り其島をホルト、モト、マリアと名くハコウヘルハ此
諸島と總てヘルゲスト諸島と名く是ハヘルゲストハ
不幸に此旅中に死したるを為し記念してかく

名く何なり

(注)ヘルゲストハコウホリ島ありサレドイク諸島の
一人の為し殺されしなり

ヘルゲストの後数月ありて甲比丹ブロウシ諸厄利亞の
商船テ、ホテルウナルトを以て此諸島に泊り航しニアホ
島の西濱に著たりたり然とし新に此名をよめす
最後は此島と見出したるハヨリア、コヘルウあり西墨
利加船へッヘリシの甲比丹あり此ロベルワハタワワッタ
ミ三月の間留住し夫より其土人 ニアホ 此を此地と
送ると是ハ千七百九十三年 寛政五
年 弟二月あり此

ロベルツ實よりワレシダトシ諸島と名けたるの始を
らん、此度ハロゲホラカウルツの匠墨利加紀行
ロベルツ此を發見せる略記を載ある如し

(注)ロゲチラカウルツの紀に載する所此諸島の名ハ
甚く精詳ありすコアホ込ともヲシハツビとする如し
然るもロイングラハハウラシシグトこの名をユアホカ島
と命ずる也

(注)此説ハコウサクセツの伴々筆記に見の
此より由て之を見ハワレシグトこの名ハロベルツを初めとする
をイングラハムを初めとするとも明ありすとも寸然るも

此諸島の發見ハ匠墨利加入より始トシイングラハムハワレシ
グトこの名を其一島と命ずるも世ハロベツハ此を
諸島と命ずりし也此ハ此名を用きたりて祖
トシ一弟ニの發見者ハワレシグトこの名を用ひす
レホリユケヨの名を命ずるとも此ハ其南東ニ在
マルクイス、テ、メ、ド、サ諸島の内ニ之を合す所あり
凡地誌家ハ图上ニ名のゆく諸島と一名ニ統るを
以て利とするハ疑ありとすとも予^思別立
すハ、ワレシグト諸島の名を地圖より省くへ
し其發見者の勤と名を世に傳へす可

ありんぬ又後世新に発見せし諸島を二百年
以前より知せたる諸島は合同して此と舊名を
内は托^托置いてありんぬや予此言ハ地誌家の取捨
を任すべしとも今予ハ地圖ハハワシコグトこの名を
用ひてこれを記すあり

此諸島ハメシドサ諸島の北西に在て次ハ奉るハ島を
以て一連とす南緯九度三十分より七度五十分に至り
西徑百三十九度五十分より百四十九度三十分の間に至る
地誌家或ハ此諸島の本名を挙す故に予ハ此より上
謂ハ所の発見者の名づけたる諸名を記す

〔其二〕ニユカイ即此島ハ此中の最上とし其最長ハ南
東隅より南西隅まで十七里あり其全周ハ予ハ其
北側を檢すべし能くを以て之を定むる能く
其方置ハ南東より南西めりて東北東と西南西の向
とす南側隅より北西に向ひし後北東向とあり南東
側隅の向ハ全く北に向ふ如し其南東隅とハルゲス
止ハポイント、マルチと名く我測ハ後ハ南緯八度五
十七分西徑百三十九度三十二分三十分とす其南隅ハ緯
八度五十八分四十分西徑百三十九度四十四分三十分其北
隅ハ緯八度五十三分三十分西徑百三十九度四十九分の

ありイコグラハム此をヘララ、イスラドト名つくイマル
カドハ此をイスレ、ヘアチイスと名つけバニゲス止ハコレ
ヘリイマルチス、イスラドトシロベルワハアダムス、
イスラドト名つく

〔注〕此島は逗留すり内は其島の本名を知らんと要
すりのこゝろ寸 猶其容聲の性情を理會せんと
カミタシ其名謂の實を合らんを欲す然るに
引イレルコト諸島を呼び出すの音あるを見す

〔其三〕ニアホカ此島の諸島の最東は在其西隅ハ我
測り緯八度五十八分十五秒徑百三十九度十三分〇〇寸

ニユカイワのホイントマル子コト南^東度八十七度〇〇分
十八里の距す其方嚮ハ東北東と西南西にして長
九里あり其西側ハ一湾曲あり此ハ我等に見たり呼ぶ
すマルカトハ全く此島を見すバニグラハ此をワシ
グトシ、イスラドト名つくヘルゲストリヲウイスラド
トシロベルワハ此をマッサケセフ、イステドト名つく

〔其三〕ユアボア此島の諸島の最南ハ在其北隅ハ
ホルトアセナ、マリアの南ハ當て二十四里の距す
我測り緯九度二十一分三十秒徑百三十九度三十九分
〇〇寸すワリラハの航士此をイスレ、マルカドト名く

イシグラハハ此をアグムス、イスラドトシロベルツハ
ヘツヘルソ、イスラドトす予ハ此島と想らす白砂糖
塊の形ある礁をも見たりしありマルカトハ此と
レヒクと名ケイルツハ夫より三年後キユルクと
名つくへんケストハ此ガゴツキト聖際五回
の一部爪の構造を
る寺ありと見たるを記すマルカドは彼白礁と
其形を依てラヘリスクと名つくイルツハスタクイス
ラトと名つくと同一とや予ハ之を見たりし

「真四」小島やエトホア島の南隅より南東一里子の
距ニ在小平島とて周二里許カニトハイスレブラ

ツラト名つけイシグラハハハコレト名つけイルツハ
ーハと名つけロベルツハハホリユチラ、イスラドト名く
予其原名と知人と探索セー知能ハすマルカド
の測ニ此島の南緯九度二十九分三十秒とすユアホア
島ト此小平島の間ハロベルツハ嘗て通航セー所とて
最も無難の所ありと

其五及エツツニエアイチ此二つの小島トて人居を
一西島東西ト對一其間ハ幅一里の海峡を隔リ
ニユカイワの南隅より成の方ハ當て三十里を隔リ
此島ハ其近隣の島入漁の為ニ此ヨ來るとり

とも彼等りの船の好らぬ故に海上危く甚く、漢
獺は獲物なく困りたる時の外に此小列島すと
あり此二島の我等に見すと雖もマルカド及び
ヘルゲストの測量あり其両側も互に同一かすす
緯度は教分の差あり我等ニユカイの島の徑度へ
ゲユトの測と比し且我月離の測と考合せ弟四篇此
モウチユアイチイの度教を定むるも南緯八度三十
七分三十秒西徑百四十度二十分のとすイコグラ
ハム此島をワラキリと名つけロベルツハアラケ
イスラントと名く彼に遠く此島を望見て一島

と思つるあり且亦ユカイの土人も此を唯一名と呼ぶ
あり

諸厄利亞人ロベルツ数々予は詰て去拂島寮人
ヨルセブカヘルトと此島を放流せんと欲す

其七及八「チアウ」ハツチユ一ホ此二島も居人も島
とてイアラ島の長八里幅二里あり其南隅ハヘルゲス
ト及星学士コークの測も南緯七度五十九分西徑百
四十度十三分と「ゴラ」其島も上るも椰樹の
多数生するを見たりとハツチユ一ホ島の小にして
円形の島なりて其中央南緯七度五十分西徑百

四十度の六分とす此二島のニラカイワの西隅より在
亥の間は當て六十里と隔其近隣の島入此に到りて
椰子を取ると「イレクラハム」此を「コノキス島」ハレコク
島と名くへルラストハ二島を共ニロヘルツイスラース
ト名くロヘルツハ「ソワレトマントレニ」とラレグドコ
島と名くとあり

我等ニユイワ島より此諸島の肥腴の地ありを見
土人等も聞知しけり、畜類の不足あるハ亦甚し
と寸予思ふ、大洋を航する、其^道をメンドサ諸島
或ハレレグトハ諸島を寄るハ好し、不好し、決

難める、——始のころ此島に至り船中の入用の品を
得て甚しくやくあり、夫より十七年後マルカント此諸
島に到りても亦此に關係する甚し、寸此に豚
を多く買ふ事ハ出来難し、其と思ふ、是ハ此物
の此地に寡し、故のみあり、寸但サレドイク及ハレ
ルシカブ諸島のところ多くハあり、寸とも相應
ハハ有し、——然とも其土人の風俗、先祖及ハ
僧の祭ハ、豚肉を最一の供養とし、外人ハ之を
賣てを欲せり、あり、我等シクギニアより其谷中
ハ豚の多し、見たりとも其一を買來るハ甚し

容易ありすありし如し又果實の類も食用も
饒多しすりし足らす椰子の我等日用に給すま
しとも其他の然りとす椰子の及ひブロードワ
グテこの此地は多しすボルトアコナマリア及ひボル
トナコナアアコリあてハナ子を買はれしもブロードワ
グテこいありしあり是故に航海の後伯西見地
方より出て角岬と来廻るハ三月の内は為し難
長途にして此諸島にて船夫等を休息し爽快
て夫より西墨利加又ハカムサツカに向ふ
願ふ
ハ所ありす且此諸島の食糧の品を多く得

ハ事甚し思来命しす唯薪水は多く得し
しハ島人の助ありてハ水を得難し是前
言て濱は高浪ありて土人の其中に容易に往來
するも改羅巴人の為す能はず若し土人と不和の
事ありハ水を取ら難し且此土人の騒乱
易しハ我等を見し所あり知し是故に角岬と
廻りカムサツカに向ふしすハ伯西見より
直にゲメルシカリ諸島ボウルカインヒの
イスレス、ラス、ナヒカテウルス或ハフ
リントンカブス諸島に到る
ハ此等の處ありしゆくも六廻値り八廻位の

食糧と備ふは足らば——且此航路は順道にて
猶未審の諸島譬は「ヘラユイ」「ハコス」「ハバア」「ハバア」等
の諸島と搜索するの便もあり及び其海中の新島
を発見する處とあり——若又亞墨利かの北西濱
或は「コーシヤク」に往人とする船は止里南亞墨利かの海
港の一人は入る——此處は新鮮の食糧多くあり
特に「コーシヤク」に往者便とし止里より「コーシヤク」まで
は甚く速く——若サドイク諸島の内は新く
好休息處と得は尤幸あり——
予此諸島は食糧と貯へ入るは其利と称す

に足らずと——猶予委しく搜索せし所のタイ
ヨ、ホア—及び「エカイ」南濱の記を載するも亦無用
とせず此濱は全く高く——裂たる巖礁ありて
濱に向て傾き下り其所は好瀑布多し其内は島
の南隅に見し瀑布は最勝とす此瀑布は一の嶺
より下りゆくも二千尺許あり「キル」シウスとラシゲス
トルフ其流を尋るは「ボルト」チレチワアゴリに流出
たり其山の多くの禿嶺に連り此島の内部に入
ると見ゆ又南濱の北西側は其濱低く平地夫より
漸く内部に向て土地高くと見へるへんゲスト

の記より其濱は全く礁ありて曲湾もありすと云ふ事
我等其内の湾曲もあると一と云ふ事(一)も詳に見る事
あり諸厄利亞入口へ入るに予話するに其處は一谷あり
りて甚だ繁庶ありて其二千人を起すに足ると此谷
をホウライシラウと名つくと云ふ其處は一つの湾曲あり
然るも船を碇すへさや否と云ふ事と東側の
北隅に近き所と一湾あり子ら船の初はニユカイワ
人より由て知る所あり

南濱に三港あり(ホーバー、イェルラスト)の「コムフトロツ
レル湾」と名つくと及び「アテナ、マリア並にホルト、チシナ

ツアコリの三ツあり此終の二港の間は猶多く入江ありと
云ふも碇場とするは宜しからずホルト、チシナツアゴフハ
予已に前記すコムフトロツレル湾に我之を來過るの
みて委しく探り見す予今ホルト、アテナ、マリア湾と此
小記す

ニユカイツ島を見て東方より此に向へ先初はボイル
ト、マルネレを見行く一此に他の峯嶺と見誤ら
る所あり其處の地はコムフトロツレル湾の東隅と爲し
て遠く差出て缺き製たる礁並ひたり其隅と並に
南濱に諸厄利亞里一里許り延びて其深五十尋より

リ三十五尋ありて底ハ細砂なり此より一ツの黒い
礁ホイシトマル子なり四万里一の距を在て之を右の方
見ら此よりコムブトロツル湾北より南に開き猶其少し
西に小湾あるを見るコムブトロツル湾を全く見渡し甲
寅の間より庚申の間を延ぶる濱と真直は五六里余
入り其所はマツタウと云小島あり

此島をマツタウと名く土人此より魚を釣る故に
名くニユカイワ語は釣竿をマツタリと云

港口の東隅より三十五尋許を離る其口より真直は
此島に向て百尋若し百五十尋許の距あり之を糸

回す時ハボルトアテナ、マリア港トて其口の西側は
又一小島マツタウの如きあり此二島の間三十尋
許の峽を隔て唯小舟を通す一此小島を土人モツト
スウと名づく

モツトスウとい大島の美此島は小なるを嘲り名づく
此島より十尋若し十五尋を離て一礁ありて著し
とすマツタウとモツトスウとを以てボルトアテナマリヲ
湾の口とす此港口を出入する其西側の島は近く
寄すべしとす風の弱きも強きも甚は危しとす
湾内は風ありて此両側を離る五十尋若し東側

小依るやうにして来る時ハ危き夏あり若風弱
き風の替り易き時ハ此より来る一より寸此湾ハ
高山とて固まりて常々風の替り多く其爪忽ち東
忽ち西或ハ忽ち逆爪とあり或ハ全く止むてありて甚
危きあり借此より碇する夏ハ甚々容易あり寸此北濱
より四万里ありて此湾ハ東西向に廣く其東濱に近
四万里許の處に碇場小垣一と寸此深十四五尋の
處に東西向碇す一北濱に小川ありて水と汲み
一濱より半里許あり東側と西側より垣一と寸
るハ大爪に當る事あり故あり我船ハ十日の間此よ

碇ヒ一の一度も碇綱を乱日一事あり然をとし
子の船ハ西側を碇して日々も碇綱を直したる
あり

ワシントン諸島の氣候ハ此より近きメンドサ諸島の
氣候と異あり寸とすマルカンドの紀行より第六月
ポルトマトレンサス^{セントキリ}スナナ島^{スナナ島}ありてテルモメーテル二十七度
ありと我等のポルトアコナマリアナ在時ハテルモイ
テル船より二十五度と極とし常ハ二十三度
あり彼島とてハ此よりハ二度高し如此大熱あり
もし氣候ハ人の為に中和ありて其地に住む政羅巴

人等我等と詰すは氣候善ある事也此類少
工人の顔色の爽快ありて證すべしと云ん總て
兩互規の間の地方は冬時と雨の時と寸然と寸此
地方にては稀に十月も一滴の雨ありとあり此時は
大飢饉ありて工人夥しく死亡する者ありと
此諸島は南東のバサート風多し然と又南西風の
吹續くもあり此時は工人其南東隣諸島へ渡ると
ありホルトアレサマリアにては晝夜は陸と海の爪吹替り
然と大抵其爪弱く又時と山谷より暴爪起るあり
此島と測量器と地方は送り遣るべしあり

ホル子ル船の此も著せし日測量して時計の
行度を正しけり
第五月十八日一二八号時計ゲレーンイグの中教時
り遅りて七時五十一分二十四秒其毎日の遅り二秒
三の加と寸一八五六号時計遅り十時十五分
八秒其毎日の遅り二十四秒五十分減と寸
ベンニンクレーンの小時計は損たりと甲比丹
リシヤンスユイユ人を以て之を修繕し第五月十八日
一イグの中教時一時四十九分九秒の遅り
十六秒四十の減と寸ホルトアレサマリ港ロマウタウ

モットスウの間ハ南緯八度五十四分三十六秒又ホル
トアレマリアの徑度ハ及ホル子ルと第四月二十九日
より第五月四日迄四十二回の月離の測と第五月四日
より七日迄の正の測並に一二八号時計の校正教を
從て西徑百三十九度三十九分四十五秒とす

此測ハ一分を加へルダスト及ハコトクの測ハ同シ
マルカントの測よりハ殆んど半度東ありとす
アルノルツ時計三八号を從ハシントカタリ十の行
の如く百四十度四十二分三十秒又アルノルツ時計
一八五六号を從ハシントカタリ十の行めて二秒

多く百四十一度二十九分三十秒と寸羅盤ハ第五月
七日及ハ十八日の中數を從て四度三十六分三十秒
北東差と寸

潮の干満ハ濱の懸浪甚しく詳々測る事
能ハ寸然とも大抵程能六時毎々相代ると見ゆ
満ハ東より來リ朔望の四五時の間と高潮ハ
三三寸と過すと見ゆ

諸島の土人を見たるものもあれども察するにワシ
グトシ土人の形體美完あるは他諸島中が最勝あり
と思ひしコトクク此大洋地方の諸島記を以て考ふ
ワシグトシ人の如き者他諸島に比例するにありと
コトク及ホルステル能の諸島記にて證す(一)造物主

奉使日本紀行

第九篇 ニュカイワ土人記

予此大洋の諸島中にて唯サドイクとワシグトシ
諸島の土人を見たるものもあれども察するにワシ
グトシ土人の形體美完あるは他諸島中が最勝あり
と思ひしコトクク此大洋地方の諸島記を以て考ふ
ワシグトシ人の如き者他諸島に比例するにありと
コトク及ホルステル能の諸島記にて證す(一)造物主

獨 務りウシグトシ人々の其美と與へ給えり是然
ら可也諸島とウシとも平等ある天の恵を受へ
理あり故にニカイウエ人も諸島人と同じ懵懂
君臣上下の理を明しりて非ず然ともニカイウの
首首とある者僅に其眷屬類れども能其君た何
威勢を保りて此等の尊と得る所以は是其主た
る者の僅にも其徳あるに因て然りとも人其一
地方は自立の勢あり所以とすらあり
ニカイウ人の形體は高く筋強く頭長く容顔恰好
周旋便捷なり然共此美質ありて悪く俗習ナ經ハ

此其好處と消失して唯魯鈍野鄙に見ゆ先其支體
小彫文にてうれと塗り漆で黒色とす然とも彫文
あり小児婦人を見せは元其色の自ら白くして
欧羅巴人の如く但し黄色と帯び而已又ニカイ
ウ人の他諸島人と異ありとすら其体中に瘡痕
疹斑あるなく身体は清潔ありと此土人の榮とす
蓋是他諸島の人にか_{下條}詳す_{下條}と飲り節あり故に其身
を病む然るもニカイウ人の甚く之を慎み節をす
以て其患ありと見ゆ又此土人の未だ微毒と患
る_{下條} 實にニカイウ人の強健無病あり人の羨む

也。可なり是故に工人病苦を知らず又薬劑も在
らぬ。唯彼の恐ろしい病に苦しんで此の爲に病を致
す。思つて但此島人の外科術とす。創を
癒す事のみならず是に此酋首小良術を得たりと
す。見へり

〔注〕予にニカイワ島の上陸せし故に唯此島の
事を紀す然ともニカイワをワシントン諸島の一事
す。のちありすをドサ諸島も亦同じ類ありて其
言語風俗皆相似たるものとす。あり

ニカイワ工人の皆其身体完好あり内にも二人の最
勝とす。あり其一人はタイヨホアに君る兵將ありて

土言の後て此を譯せん。国王の司焼とす。其美は
猶下
其名をロウハウと云其大六尺二寸ありて強壯
の男とす其二はシラキエア谷の酋首ありてバウナグ
と名く齡は五十五に近し。一はも完好強壯の
男あり

婦人の容貌別に著し。す。あり。す。と。し。も。總て
他島より勝りて美好にして頭中等の大サ顔面ハ
長きよりハ円く。あ。めて。眼中。夾。活。顔。色。淡。紅。皓。齒
整列髪ハ卷縮し。白。く。絲。めて。結。ひ。肢。体。白。色。ありて

總てサンドイクリセイテイロ又フリレドシカブ諸
島の女より美ありとす

〔注〕シラキニアの婦女ハ「タヨホカー」の女より也

美好ハ見へたり

然とも概してこれを見せし固より偏地の爪俗
て取るべき者あり且レダ子及マルカントの旅伴の見
し如く目小苗むへきあり其熊先醜
あり寸体は多く小ありあてやし粧飾を
設け寸十八歳あり娘を見し聊も粧ありあて志
りぬきくこい必寸足とそらひてゆくあり女ハ何

をも腹非常肥太あり彼俗ハ之を好とせり
見の如何とあれ彼等ハ意醜とせり小事ハ彼
等も種々小意を用て入小隠すあれ是ハ彼ハ意
小醜とせし好と見へたりトムリコ此言よ

彼ハ粧せし時ハ品多く粧えりあり

と云ハニユカイワレ婦人よりあま當らすと此
地の女を良善ありと云ハ「ラタヘイ」土人及ワチ
ニイ下ニ事と飾り云へりあて実ハ總て行儀直
かりありと見ゆ彼ハ田舎風と云ハ其行儀あり
あて其形体の美とも夫れを謂へりありん

〔注〕ワイニイハサドイクの少女は名もて此者ハ
甲比丹メアレスハ婦ベルクイ甲比丹ト共ハ西墨利
加の北西濱に往リ時此女をワワイイより召連て
改羅巴ニ送らんとして支那ニ至リテ夫より
メアレス又彼を其本土ニ送り返シぬる其途
みて此女ハ死スルとありメアレスの紀行見ヨ
ニカイワの男子ハ其成人の比子至るハ即全体を
彫鑿して紋を刻す其工を見らば此島の工巧
巧ニ彫紋するハ外ハ地類稀ありとす其皮ハ血の
出ル程ありハ疵口を作り諸種圖を畫シ之と思

思の色ハ漆紋むあり大抵ハ黒ク青ニあり色あす
島主及島主の父ハ全く体ニ彫紋ハ黒して彫紋を
ハ肌膚ハ見へぬやうあり其眼及頭の髪ハ剃た
る所多ても皆彫紋セリテセルシカフ及フイドシカフ
諸島ニハ其体ハ彫紋セリ但フシドシカフハ唯其
島主のニ文身を刻すニユエトラド及サドイク島ハ其
面ハ彫紋すハ甲比丹キシガ記するにニユエトラ
ドトニカイワ人との彫紋の法ハ相同シ但ニカイワ人
諸物の像を彫りて全身ハ環の如く相集りて巧ニ
画を飾り婦人ハ唯平腕耳環唇ハ彫紋す其内ハ

も卑姓の者ハ全く彫紋を有るもあり此ハ由て其
彫紋するハ其貴む可あると知へ一其土人の内ハ
彫紋するハ術とする者あり其術者の一人ハ船ヲ
招て或船夫の彫紋せしと見しとあり

男子皆亀頭皮と裁らす然るも稀ハ其皮を縦ハ
裂たるも見ゆ又サタキリスナト嶋の土人の一ハ絲を
以て亀頭皮を結へり是ハ其を避る為と云或ハ
姦慾の防此為ありと云然るも是其實ハありすと
見ゆ此皮を察するハ陰處ハ天然より掩ひある所
めて之を掩ひ隠るハ法とすニカイサ人の意ハ唯之

を隠すと慎み然らざるハ大なる耻とする所と見へ
たり嘗て我船の周田ハ島の女子とも多く戯を遊び
あり一時船夫の一人偶々其陰を現したるハ彼
女甚耻らして此船夫を嫌へるありロベツルも云ニユカ
イワの婦人の陰を掩ふの慎あり男とい甚嫌ひ避
るハ其俗習とす

男子ハ常ハ裸ハして島主トシとも亦然リ唯腰
の周ハ狭ハ布を纏ふもあり此帯をフリンドシカア島
人のマロト名クニカイワ人の其密あると云レアボと名
け兼あると云アチユと名ク然るも此ともニカイワ人

尽く之と帯るは非す彼「ラハ」之貴族ありと之と
帯す予彼は兩度きて之とあり多れも亦後船より
来る時を見るよ之と帯すあり薦席の類と用の島
主の美子もマツトと負て船より来るを見るよ甚く藤
品きて之と肩に懸て腰の下きて結ぶ唯其脊を掩
ふのも也其他衣服は貴人も猶島主も有るなり
是其土俗より由て然るの事ありす且其物より
「故ありん」コークリヌラナ島にて其島主の美服と
著るを見るなりあり
ニユカイワ人も飾とすり物あり小ありす然共此と爵

位の表とすゆふ非す予島主も其親族も飾と
用たりを見るす唯島主の美子の家齒を飾とす用ひ
たりを見る是ハホルステル欲りメドサの土人も見たり
と同一と見ゆ家の齒と赤色の豆と其所の最好の
飾とすホルステル委し記あり予此ゆ之と異説す
一頭飾ハ雞の黒き羽或ハ椰樹の絲真其珠と飾
り或ハ白木の蘆と絲と並へて編きて齒を物あり
又或ハ大なる葉ハ頭髮の結を挿して飾とす耳飾
ハ白く円ハ甲貝の堅して砂質と満たる物小孔を
穿て家齒と挿たりと耳原より貫くあり頭飾ハ最

も重なり其形リシグカラク頭頭のの如く半月形トシク
白木を以て造リ赤豆貼と敷貼貼寸是ハ僧徒の用ニ
可ト寸庸人の其頭飾全く豚歯を以て椰樹の絲を
て編てあり或ハ唯豚歯と頭の因若ハ髭の辺ハ掛
るあり又ハ林檎の大サある囊を造りて之を赤豆
豆を亮て之を掛るもあり頭ハ両側ハ髪を巾し遺
して其餘を剃去し其遺ハ髪ハ螺のこくハ巻く可
多クハ髪を全く剃去せず短く之をトトト置く也
然共亞弗利加黑人の如くあり寸
婦女の衣ハ全く帯の類ありて男の如く胯間より

貫き纏ふて排の辺ハ及小然とも彼等船まで遊
来る時ハ彼帯の如きものも子ハ亦多クも脱棄て
遊ぶあり身体を日々椰子油を塗りて光澤を
せしむ甚ハ悪臭あり是太陽の輝を防く為
或ハ臭を避る為り予に於て解する事あり男子の
彫紋ハ黄色に塗るも亦何の為とハ明かせ
るあり此地の女ハ頭飾を用る者を見ず而して
彼各扇を持たり其扇ハ半規の形ありて巾を以て
巧み編きたる物あり或ハ蛸殻灰を以て之を塗り白
く寸婦女の髪ハ皆黒く多く油を塗り頭上ハ束

て一結とありあり

ニカイウ入の家室ハ狭ク構て葺の類て樹枝を以て造る其樹を土人ハアウと名く此を椰葉ココヤシトシスロイド 又て結ふ其家後ハ高く前ハ低くゾロドフリユク樹の乾葉を以て葺て屋トシ厚五寸許ハ一側ニ向て降り室内ハ縦ニ田材を以て隔て二區に分ち前ハ石を敷て後ハ薦を敷てあり後ある方ハ家族及家具具と置あり又別ハ小區トシ田ニたる處あり此ハ其室とすり物と貯ふあり屋下の壁ハ飲瓢太鼓弓矢等と懸て門戸ハ家の中

半の處ニ在高三尺許あり家族常々此ニ集る其住する家より二十尋或ハ二十五尋と隔て又一箇の家あり其構造リハ前のごとく唯其家ハ地基一尺半ハ二尺許高々と異ありと寸此家の前ハ平あり高さ地面ありて家の長と齊しく幅ハ十尺或ハ十二尺あり此家ハ饗宴の處トシ唯島主ト其兄弟及僧官ト一二の兵將トのみ此ニ入るを許すあり此客屋ある者ハ甚ハ貴族ありて常々衆客ト饗宴ハ伴ふありあり此侶伴ハ入りたる者ハ如何成凱體ハても共ニ此ハ食する度と得ると云と寸此伴ハ入

者ハ各其体ニ標トスリ彫文あり譬ハ島主の伴ハ
總テ二十六人あり各胸ニ方形長六寸幅四寸あり
角形ト彫寸彼諸厄利亞人口ヘルリ其伴ハ入る者
ありト拂高察人ヨロヒラカフリト彫文ハ一眼の標ト
彼ノ伴ト守口ヘルツ云彼ハ飢饉ニ苦シむるありハ
其伴ハ入るトありト扱予ハ此伴ト結ハ各の生
理ハ於テ不審あり莫あり夫此伴ト結ハ各の生
ト保ツ為のトありト守口ヘルツの言ハ後ヘハ猶大ニ
貴^貴賚^賚トスリ故ハ人ハ伴ト結ハ^ハ願^願ハ予ハ思ハ
此伴ト結ハ自然の勢ハ益ありトセ^ハ何者ハ

其人ハ徳ありテ其伴ト恵ムハ足^ハれハあり島主の
如クハ彼教ト予ハ示^ハテ已^ハハ甚^ハク各番ありトあり
且少^ハト人ハ恩ト謝スリ心ありト知^ハハ
〔送〕島主我船ト訪ハ每ハ彼ハ贈^ハハの寸其品ハ元^ハ
僅あり物ありトニカイワ人ハ^ハ重宝トスリ物ハ
然共彼より一物トモ我ハ贈^ハル^ハトあり椰子トモ返
禮ト^ハ送^ハラ^ハ寸第七篇ハ記スリ如ク彼設テ騷動
ト^ハ後復我船ト来リ和談の印ト^ハ一箇の胡
枰樹ト送^ハリト夫トモ又後悔ト起^ハテ早時
許^ハ過^ハテ彼予ト^ハ其品用ハ當^ハラ^ハトありハ

子返しあふし詰ひるあり

如此人ありて常に衆人其値高く養ふ事、恐く、
為し得へざる非ず若其値すべしあり伴と之と
其伴を結ふると拒むるは島主ありたり勢は
ありとせん是此土の風ありハニユカイワの島主も今
より殺害を經ハ全く威勢を失ひ其伴とする者の
外ハ谷中の賤民も今を施すと能はず衰とあり
へりあり借婦女ハ此伴ハ^其其夫と之共
伴食すると許さず又豚肉を食するも大抵ハ婦人ハ
禁して与へず口をツも予ハ告て云豚肉養ありと之

とも是を我婦に分て能はず

「此地方の諸島人皆婦人の豚肉を食ふこと
禁す」といふ

其住處より十歩或ハ十五歩を去て地ハ許多の洞
を穿て食料を貯ふ處とす其洞穴ハ石若ハ木葉を
以て掩とす其食料ハ炙り多り魚及シユールホツジを最
多しとす此シユールホツジハ名根とブロードブリユクトを以て
泥のころり多り物あり此等の品を多く貯へ数月
の食料、當ハ此地洞中にてハ長く盡敗せずとあり
食を製する最も簡易の法ありて「テタヘイト」入の法の

如く彼の食料の首とするは、シユールボツシンドにて其味
悪くす猶アツヘルタルト林檎めて製す菓餅の事し其他ハヤトハ
クハハ子止及甘蔗等あり食物を炙よハハ子ハ葉の上
に置きて之を焼下鉢を用りてし魚ハ大抵生きて食
し又ハ塩汁ハ漬漬し用の食する状ハ甚ハ賤しく唯
指をシユールボツシンド泥中ニ挿て握り喰ふ予島主の食
するを見たり然りとす其餘ハ推して知テ食し
終る即ち午を洗ふあり

器械最も少く鋭尖あり石を以て鑽とし政羅巴の
斧の代りハ重く扁あり石を以て之ハ當つ彼我等

より鉄小片を得、直ニ此を木ニ植て其鉄の側
と石研小礫と及ハし用の予彼の石斧を用ひて澳船と
造り居たりと見る家内の用具ハ椰子殼瓢鼓樹皮
杯釣竿釣糸及鱗齒フカ是ハ刺刀ハ代用するラハスヒシ及
椰子杯ハ常ニ鱗の齒を飾とあり

武器ハ棒木矛抛石あり棒ハカニエアリト木めて造り
此本ハ甚ハ堅直光澤あり長五尺許ありて重ハ一貫
より少くす其一端ハ人頭の状を像り矛ハ同木
及び長十尺或ハ十二尺其中ハ一寸許の太ありて
両端ハ尖鋭あり抛石其ハ細ハ裂きたる索めて綯

たゞゆて其中幅廣くして此石と揃ひあり
ニカイロ人の魚と捕ら法一む礁間に生る草の根と
取て之と石と以て碎き細りて漁者其品と取て
自ら水中に潜て之と水底に散布す如此すれ暫く
して魚尽く酔る如く半死に向て水面に浮む時之と
捕るあり二細りて以て捕らると然共此法は甚く少
と寸タヨに唯漁船八艘あり而已三釣竿を以寸
釣糸よりハワ樹皮の糸を以て寸此糸は船を繫む
之と用らるものあり或は椰子の糸を以て製するも
あり是は最も堅緻ありと寸但魚と捕ら島中の

賤人の業として生産を為す者として我船にて魚と
善償^債らる之を買ふといとも唯兩度ボテニ^名魚の七八口
を送り来るのことは是にて其漁業とする者の少く
と知へ

〔注〕ニカイロ人於て漁者の魚と毒して取ら此法と
同一を見たり

ニカイロ人の船は其用る材より由て三品ありブロードワ
ユク樹とマヨ樹と造らハタマ樹と造らありハ
賤し寸タマ樹と造ら其用を為事久く且
舟の走りと速ありと貴し寸其下品とするハ椰樹の

索木して諸本と編こりたる也。予此諸舟の中にて最大とす。其長二十三尺幅二尺半深二尺半ありと見ら

〔注〕ニユカイワの番船（一）海上より出す。其船を積こす

大材と結ひて其顛覆を防ぎりし

ニユカイワ人は事業とす。其耕墾を務るの業少く、此洋中の他島より甚しとす。此島より「ヒルケル」へ「イタロラテル」へ「ブシト」の園あり。その産物此を塔（塔）養の業とす。是故にタロラテルの産物之より且て工入男女の衣服の飾悪あり。よて知「フロトホ」に「バナリ」に椰樹の類も之を繁滋する術あり。寸之を植るは只

土小穴を穿て其樹の截枝と此を柿置一月許を経て其樹の自ら生植らる。任すのこ別々培ふ。其如し。如し。如し。男子の耕墾の労も如く。漢の賤（賤）にして之を為す。其家宅及器械等の制作業とす。ゆゑの多事あり。是故に男子常に閑暇あり。終日宅に居て其婦妻と戯遊するの外。婦女は男子に比す。其の事業多く繩索糸紐を製し。扇を造り。又其夫及己の飾とする物を作り。最も女の業とす。其衣服とする織物と作るあり。此品糸細二種あり。其糸あり。色灰色あり。布として樹筋とて織り。此を帯

「カヤボス」用の賈婦の之を衣とす其細ありハハト
ルハルビイ」とて製す其色白く光澤あり貴婦の衣及
頭飾とし用の此細ありとす只其存ありハ對
して細布とす然とも緻察ありハ非と予之を見たり
よ亦疏布とて密ありとのあり

予此島主の勢を見よ先其服飾は於てハ少ハ
土人と別あり又土人と使令する威しあり彼人を
あつ時ハ又人なりそれ不との報とあり戦の
時ハ彼ハ主將とありと聞ハ其時の威勢ハ少
也ハ察とあり其將たる者ハ唯其強健ハ少ハ勇

と以て衆人ハ推し貴とらると見ゆれハ予ハ考まハ
あテハエハ島主ハマウハ兵將の威勢ハ及ふハ少
と思ハ此島主の土人ハ勝せりとすハ唯彼ハ
大富トて他人よりハ眷族多く保てるハ也
島主の權ハあれとも亦此ハ少ハ國政トすハ事
ハ盜ハ罪トせらるのありハ猶事ハ少ハ事
之ハ功トす燕漁ハ唯島主の眷族ハ於てすハ罪
トす人ト殺す者ハ罪トすハ島主若ハ僧ト
之ハ罪トすトて其殺されたる者の親族トハ仇ト
報て之ハ殺すあり

〔注〕我船の此に逗留する中、盗の患ありしに
船より常に番人の兵器と具して守りある故に
彼等も盗むを為すの間と得ずと見へたり
ニカイ人の家裏に予見聞する可く後へ善くす
と思ひ先夫妻の結を解きて放流を禁ずとて
夫婦の會は何の礼式もなし唯互に愛し親むより
外に羨み此洋中諸島の中は男女の別も著し
て法ありしなりと聞ともニカイ人よ絶て其羨
失へりと思ひ女淫を罪とし之を犯すも
互に相悪ふ其俗とすりと見へり

〔注〕拂郎察人の既、此に十年住居して全く此島
人とありあり者云此島人の其妹と淫するあり
是此島人の性の正しき證あり

飢饉の時、夫其妻を殺して其肉を食し又子を殺
して之を食して其味を賞すと云殘虐の甚しニカイ
人所為ありと聞し但ロベルツの島主は姻屬あり
て島主の黨ありし務て島主の事善く共彼ら
語り島主及島主の屬たる者若其妻他人は後小
てありし見せ自ら之を殺すの權を許さる此に
由て之を見せ其殘虐あり事ありし察すし彼

亦去島主の属の女子たりも婚嫁するも於て
別々衆人は異ある貴族の如くなり

島主の黨とする者ハヒユルアルマーレあり此の勤ハ
常々島主家族の側ニ居て其命令を傳ふあり此
由て島主ハ此地の主家たるを顯すあり常々島主
の婦人を守護し其弟一婦人の在らぬ時ハ弟二の
婦人を守護す究竟ニユルアルマーレハ島主の警固
して而して其婦人の守護あり

ニユカイ人の人肉を食ふといふの虚ありすと思ふ
也ハ彼ハ近鄰の人と戦ふハ人肉を得ん為也

或云ニユカイ人の性ハ虎狼に似たり其戦を
ハ大敵と大戦すハ非ず唯常々敵と相親ひ合て
之と殺すハ在り其闘の術とするハ久しく伏し少
し動く寸氣息を静め疾く走り礁礁ハ能飛越る
譽とす土人の内ハマウウと最勝の強勇とす拂郎
察人の能此諸術ハ巧みありして彼数々予ハ話す
其闘ハ勝たる莫といハロヘルツも云拂郎察人の闘勝
て其敵の肉を食ふ寸之と豚肉を替ゆ
此辺の諸谷ハシケギユルホッテイシケウアハタイヨホア
と常々闘とあり又内地ハ在る一國も同く

敵とす「ホー」の兵、千餘あり「タアイヒス」と名く大海の
軍と云美ありと此「タアイヒス」と「タアヨホア」とい海上の
闘はあく唯陸地は於て闘ふ而已此のまゝ諸谷は
群と結ふ人々各々其前^首主ありて之を貴き国主と
し之を属するに其酋主多るも格別ある勢ありて
わづらひて其主家を貴むて何の故と云と云す
恐く是昔より愚昧ありてかく習くせらるるに因るの
ありん「クットーイウチ」^{タアヨホ}の子嘗て「タアイヒス」の女と婚と
結い兩國を別つ海をて和睦す是海は「ターボ」に清洋
めて血と穢せし事ありて所と云れあり後子世子其

妃と離別し妃は其親家へ帰りける故に又二国互
に戦を起し終に陸のまゝありて海上をて及いぬ
然るに彼妃は其谷をて死し其霊神とありて常に
彼谷辺に遊行するに由て此神と驚かすへり寸建
二国の海戦を止免終に永く相和睦する莫きあり
たりと又内地の一酋「マウダイ」と名く兵卒二百と領
する者あり是は今「クットーイウチ」の女と婚し相和睦
して戦を止めりて此「コウダイ」は常に「タアヨホ」とい
来り住し「マウハウ」及「バラシ」に次て美大夫あり我船
に来りたる故に我等皆之と見り「タアヨホ」人とタイ

5

ヒス人の陸地の戦ハハ互ニ休息の時あり其休時ハ
躍リ祭リて神祭ヲ有寸也此時ハ敵モ味方モ定
め所リて戦ヲ休メ其祭ヲ有、並ニ其時ハ人ノ諸
事ノ用意支度ヲ調ふ有リ是れハ如ク闘ハ好
ヒ人あれとも時々休ミテ用意ヲ調ふ有リ今ハ既
戦ヲ休テ有リ六月ヲ經ナリ猶此後八月ヲ經テ
其祭の時ト有也其祭の終リテ後人々已ラ家ニ歸リ
夫より復戦ヲ始シハ此戦の休ヲ双方モ志スナリ
よハ山頂ハ椰樹の枝ヲ建ルヲ見テ各戦ヲ休メ
其旋寸カク戦ヲ休ル神あるモ其後戦ハ根元ヲ

除クヲ能ハ寸ト見ヘたり又此国ニても近辺の国
あつても其貴子所の僧ハ死スリ時ハ必ず人三人ヲ
贄ニ供ルヲ習フ寸其贄ニ成者ハ各国内の人ヲ以テ
セ寸必ず近隣の国人ヲ執ヘ来リテ之ヲ有寸故ニ
右の贄ニ求ル時ハ直ニ船ヲ舩シテ他方の弱ニ船
ヲ奪テ其人ヲ用ル有リ此時ハ海上あつて戦ヲ始
シハ然老モ贄の教ヲ有ルハ此戦ハ止ミテ海ハ
又以前の如ク清淨の處トスル有リ或ハ海上あつて
贄ヲ得ル時ハ陸ニテ礁の間ニ島人の釣ニ来
ルヲ見テ之ヲ執不之ヲ供ルニ直ニ切殺スル有寸

此と樹に繫ぎ懸て其肉の骨より離るるまで突
心あり此誓初日は午に入らる時即ち國人
も觸て戦を起すあり然とも此戦は其誓の救僅な
まは久しかりて止む事ありと我等返苗の
時クヨアの首僧大病めて快復の思来ありと人の不
あれは其誓の戦の起らんとする時節ありき
此僧あれは亦僧の教法も何なりニユカイ人の
教法如何なり其土俗を見て容易に察せらる
へ其教とする所此より由て身を修め心と安するの
理あり唯現在の安穩を得ん為に修する其見の

是僧とターボとこれに之を祈りありわく此僧と此
土人の貴ふ僧法は要とする其其僧
法は理あり異怪の事とす彼はユアア神靈も名く
らよ種々あり即僧及島主の属の靈を崇めてユ
アア又彼等改羅巴人とも亦アアと思へり何者
彼等視る所は唯地平上の其目も届く所の外を
志す故に改羅巴の船は雲中より降り来ると思
て是をユアアの所為とするあり且又雷は改羅巴船
の雲中より浮きて大砲を放つ音ありと思ひ大砲を
見ては甚だ恐怖とあり

5

嘗て此島主の弟我船を来りし時船中にて砲を
放てし其人甚だ恐怖して只ルツよえくみつき死
せり。如き顔色あり撃ちぬりしマツラ、マツテ
と口小唱へ居たりしあり

彼ッタイボと名くらま其僧法の根基ありしゆし
人よ益ありし見ゆ何者タイボとすり所ハ島主と
とも之を犯す能はず何の理より甚だ之を崇む
とくするありタイボと建る僧の爲とくし所とこれ
も平人も亦之を建る事を得し一譬ハ人ありく
ブロトフリユク樹或ハ椰樹或ハ其園圃小盗若く之を

損し害する者あるを防くハ其又或ハ島主或ハ
其他の人の靈の名を以て其樹若ハ其家よ在する
を人々よ告る時ハ人敢て之を侵すと云ふあり若
人之を侵しタイボと傷る時ハ此者ヲ「キ」或ハ「キイス」
と名け此者ハ必ず敵を殺し又必ず僧あり其悪
よ報ふまありとす諸厄利五人ロベツ毎度改羅巴人
ハ彼ハ所謂タイボありと云然も彼亦既に七年来
此地よ居て此土人よ交るあれハ始のより我とタイ
ボとす其威光を消して此以後の戦を執りれと
あり敵の爲に肉を喰ふんや否をも恐るし所ありと

口ハツル此地の法教の委しき其の志す可見也然共
其大畧を語りし先其死したる者の葬式の其屍
を洗ひて新しき衣を被せ一ヶ平ある降紀と地を
載せて又之を覆ふは新しき衣を被て以て其翌
日其死者の親屬集りて祭をす也此は懃志の者
も加りて其祭をすを僧も常と此は在て太
夏あり但婦女は此祭をす下あり扱其祭りよハ
富者の家と以て是は家の様の大夏は非是ハ人
の食とす夏稀あるものとし其外ハ「タウララ」
リロードフリユクを供し其賓客相集る時ハ家の頭と切り

落すあり此めて死者の下界に障りあり往生す
夏を祝すあり扱其肉ハ僧の私に用るとあり
唯僅ある肉と一ヶ石の下に貯へ置ありかして其
親屬友人数月の間此屍を守り不断椰油を以て屍
に塗り其腐壞を防ぎ屍既ハ乾固して石のうちに
初祭あり十二月を過て又祭をすあり此祭ハ死
者の既ハ障あり他界に往き届きたるを謝する為
かすり所ありて葬の式ハ是めて終り是は於て其
屍を碎り其骨を拾て小箱にロードカリコク木にて造る
物を入て墓所所謂モライに送り遣るあり此墓所

わし婦女に殺す罪をて近く度と禁すあり
此辺の諸島は行ふ魔術あり是も其僧教と相あふ
事と思つる何者い唯僧のこ此魔術と行ふて此
由て土人々恐れしめ其布施物と貪り取りあり其
術を「おじ」名く此とて入と呪咀して漸々と其入と
表へしめ弟二十日ありて死せしむ其術と行ふ
先其人の唾液大小便を求め取て此より一種の粉を
交へ之を異様と組たる財布のとり物を入て之を
土に埋む置あり其秘とすり度い財布の組めし
其粉の製法ありとや其財布を埋むし其術の力

めて呪い多し人病つきて日小増し衰弱し終り二十日
ありて死すあり扱わくのまゝ呪ふ者も猶十
九日より前ある此り為る冢若し其重宝とす心
物を出して其命を助かす人事と術主は請ふ時ハ
則其埋したる物と掘出せば其病漸くと快くありて
暫の内にて平復すと可いとい他事と智ある男が
まも此魔術と信すと見へ此も同く佛高察人
も之を信して此術を知らんと辛苦とあり是
彼の歌とすりロベツと此術にて除ふんと欲し
るせし然共ロベツ此魔を防ぐ法と所持せし故に

魔術にて呪咀するて能はずも其防りといふは
何そとあれ一個の武器を所持せしめありとロベツ
ハ猶其敵を防ぐん為と予と甲比丹リシヤスナイといふ
折入ての望みありとて一對のヒストル銃並に一銃の
銃彈丸火薬と与へりて求めあり我等ロベツといふ
此地にて多く此事を達し兵たる義理もあはれ此
求よの應とていふとあれとも然共熟考して彼ら為
益とありしとての理あはれ其望も後寸何者此地
に戦起りたりんよロベツといふ我等贈る所の玉葉を
以て之を射下ありし然る時彼ら玉葉を隠し

貯へたりといふ事ハ島中の人皆えりて此より事
を起し彼ら宝を奪うんと企る者ありし然る時ハ
ロヘルツカ身ハ甚小危り夏疑あり然らハ其身を守ん
為の玉葉とて及て害を引出す道理あれ此求よ
應すへり寸と彼ら諭して他の品の彼の益とあり
へり物と贈りて火器と与ふハ止しあり
ロベツハ予ハ性深し其意定らぬやうに見しとや
とよりや智あり男ありて予其善性あるを信す彼の敵
とすり拂高察人ハロベツカ夏といふやハ彼ら盗する
事ハ甚小拙ありて飢饉の地ハ殆んと餓死せん

とせし、漸々此土人の貴まれ才智の土人の勝
き故に大に土人と心服させて終りに此地勝たり
とする武人より威勢ありて、鳴主の為最重ん
じらるる人なり也彼の疑あり嘗て此より来りし教
導士ニコロク人より此島人を教化する事ありし
は是に彼らニコライ人を契律斯教キリスをキリスらしむるに簡
ありし見ゆ然とも先此土俗は倫の道と喻す其
の慮あり唯一途を教導すと欲する也予も思ふ
ロベルツ才智も威勢も此土人を教化するより教導士
ニコロク等より勝りたるしと彼此地より自ら好き

家と建て少許の土地を有て務て其土力を起し務
て其土力を起し務て土人の志より心事を教へ
曉して實に今彼の甚に幸福の生活をなせりあり
然るも彼常は此近隣の總てカニバシ人倫の道に
まじりの種類あり困りし且次て起らんとする戦
恐る也予後告て云汝をサドワイク諸島に伴ひ送ら
し彼所より支那へ行へし便りありしと勸免
されし彼其妻子を棄て別を行はんと決し得ず多
くは彼の一生はニコライにて終る那ら也
ニコライ人の如き蠢愚ありし音曲の感動を意を用

すと見ゆ其粗暴ありと彼、為す音曲の如く之を
聞て歩少しも樂しむ心ありや、如く見へり其音
曲、彼等の性と同く其用ゆる所の音器を見て知る
彼等音曲にて情意を和らけ、いふ理、合点、守
己の妻子を殺すも哀しと思ふぬふもの人あり、
笛ありの所もれあり音よ、感を動かし、唯彼
の用ゆる音器、己の勢の強暴を激動する物と好
太鼓、不恰好ある大なる者、少く其音、濁て直ぐ
好く又好て喜悦音、手と以て実躰を打平掌を強
けありすと、其唱謡も舞踊も同く野鄙ありて

踊、後、飛び上る状、少く其両手と高く、こゝの指
と振り、動かし、あり、前の如く、手と打て、其拍子と
ふす唱歌、唯、吠るやうある声とあり、如く、の如く
して、彼等、嬉しす、予思ふ、よ、ニユカイ、人、實、よ、好、す、
る音曲と聞、し、め、い、これ、感、す、へ、ら、如何、ん

此島の口、教の詳あり、こゝ、知、へ、り、す、と、り、い、も、其、大、畧
ハ、考、ふ、下、下、口、へ、ん、以、テ、説、よ、ハ、タ、イ、ヨ、ホ、ア、止、し、兵、八、百、と、出
す、ハ、一、町、に、よ、一、千、人、シ、テ、ギ、ニ、ア、五、百、人、マ、ク、タ、イ、よ、千、二、百
人、タ、イ、ヨ、ホ、止、の、南、西、あり、ハ、ツ、ライ、シ、ク、ウ、ツ、並、に、其、北、東、の、谷、下
に、各、千、二、百、人、あり、と、ロ、ベ、ツ、ウ、此、一、教、の、算、も、意、を、以、て

之を察せしめて其実数を知て云ふ非ス今其兵士
五千九百の數とせし婦女小兒老人を加へて此數は
三倍すべし然とも平思ふ此數は甚多かるべし
とす如何とあれ此土人の甚産育ゆく又予「タヨ
ホアイ」シケギエ正の西所は於て極老の人を見し
若貝ルツの算にて總口數一万七千七百若し總數一万
八千ありし可ヘルツの算ヨホ正の兵數八百とすれ
之を三倍して二千四百人ありし然共予見ら
るべし八百より一十許ありて其内は三四百の婦女あり
とす且其住處も大抵海濱に在て政羅巴の船を

見せし入々鉄を得んてを欲し唯タヨホア酋首の母子
以外海濱に出来らるるありし見ゆ此は由と
之を考ふよヘルツの算は三分の一過數と思ふ如此
すれば總口數僅に一万二千とす此島周圍六十里餘
ありて氣候は良善
且黴毒し未だ此

地は傳染するべしして人口は實は甚に寡少
ありとす是其間戰常に止す又生人と贅とし飢饉
よ婦女殊に女子は八九歳あるを殺し食し嫁
娶して孳育するは慮多く人口の減する所以あり
ロベツ云此地の婦人の二子を得るを最多とす大抵

一子又毎日子あり者多し此も苗て一夫妻も一子ありてし改羅巴の常も此して唯四か一とす
ニカイワ人の爪俗の常も此して予此にて諸厄利
五人と拂高察人とも發て之を證明するを得たり
叔ニカイワ人の我等も^梅按するに常も誠実とありし
其物と交易するも甚し正直あり常も先彼より椰子
と我等に出しよへく而後其代も鍍片と請取り又我
等も為薪木と代り水桶と搬送する等の助をあり
て彼も辛勞と我も施すもゆめす此海の諸島の
人の盜を以て常とすらし我等も對して此土人の

盜りしを止め我等も對して何時も喜色ありて
嬉しめり容子あり其顔色も彼等も良姓ありと
顯しぬ一言よ去い我此も逗留する十日の間彼等
も銃砲にて威すも^梅小事も一度もあらずし
^梅ありぬ我等も^梅按するに實に我も船の銃砲を
懼れ且我より彼も報ゆる所の物と得んと欲する
為にせし^梅見へ多し然る時彼等も良姓ありし
見し誠実の^梅非す總て如此改羅巴人よ未
審の土人も猶智者の考よ之を教化すべし
哉如何せん

予南洋の諸島に於て始々ニユカイウ入と良善と思ひ
し事其誠実あり予より下、記する可
く詳より先人

予此處で逢ふる改羅巴の二人、久しく此島に居
て其土人と交り多し、皆能土人の性質を知る者
あり、此二人共ニユカイウ人を謂ふ、實に残忍暴悪
あり、其男女を撰り予總てカニバシ
南亞墨利加
諸島の名は
て蠢愚の夫人との名を免れ、其顔色の嬉色ある
通稱するあり、
とい、全く相反りて強悪あれ、唯彼、恐る、所
と欲する所あり、と以て外飾してかく見せしもの

あり、彼二人の改羅巴人、我等に話するニユカイウ入
の戦に於て其敵を殺す、直に其首を断り其血を
吸ひ、又此を其食盤に具して、充賞味とす、予始免
此話を聞て信せず、虚誕と見、
ハ、尔後猶彼等、話
す、聞て實に然りとす、此改羅巴の二人、此地に
於て互に相忌み嫌ひ互に仇とするもの多し、あれ
ども土人の残忍あり、
予、此を云、二人の詞常
に相符合り、特にカニバシ云、自ら敵を殺し、時、己
人肉を食ひ得られ、此を以て他人の豚肉を換へ
てこれを食ひ、
カニバシ

猶此二人の語よ云首級を賣り人髪を以て器械の
飾りし家什の飾りも多し人骨を以てし又人肉は
彼等よ其を美味とせし噴如此ハニカイウ人のカニバ
しこも何ぞ疑はん其敵を殺して其血を吸ふと
ニカイウ人及サドイタ諸島人と同く總て南洋
諸島ハ皆然りと然共此地方の諸島人の其残忍最
も甚しく諸カニバレシハ過く此海の北西濱の人種
の中ハ比すれハ尤も甚しし
ニカイウ人の飢饉に逢ふ時ハ男子已の妻子及老親
を殺して其肉を煮炙して喜んで之を食すとニカイウ

の婦人の外見ハ柔和ありて多嬌ありと見るの他
ありと思ひしハ其夫の許ありやと其肉を
食ふ膳をも嫌ハすあり「セラルクホルステン」の説南洋
諸島の人ハ姓良和あり唯彼ハ忤送すハ他邦の人を
ハ之を殺して其血を吸ふハ近歲「ホルト、アテナ、マリア」の
亞墨利加商船の船夫武備ありニカイウハ上陸し
りハ土人其武具ありを見て衆人集て之を執て引
て峽間に至り之を殺さんとす諸厄利亞人此ハ為
甚ハ辛苦ハ島主ハ請て辛して之を救ひ助けたり
此ハ思へハ我等ハ此地ハ遠道とし間土人の柔和

か見(一)の全く彼を欲する(四)の爲めにして若
我等の扱彼を及する(五)の爲めにして暴虐を
へて(六)あきらめ(七)既(八)我船(九)を(十)拂郎察人の偽計あり
し時(十一)二人の潰れて(十二)忽ち騒乱(十三)を(十四)起して(十五)察せらる(十六)其
事(十七)は(十八)篇七(十九)篇(二十)に記せり

ニユカイ人(一)は(二)人(三)の(四)結交(五)の(六)約束(七)を(八)爲す(九)法(十)も(十一)あ(十二)く(十三)神佛
の(十四)法(十五)も(十六)あ(十七)く(十八)人倫(十九)の(二十)教(二十一)も(二十二)あ(二十三)く(二十四)唯(二十五)其(二十六)性(二十七)欲(二十八)を(二十九)遂(三十)る(三十一)より
外(三十二)の(三十三)所(三十四)爲(三十五)る(三十六)也(三十七)一(三十八)言(三十九)よ(四十)去(四十一)り(四十二)人(四十三)と(四十四)あ(四十五)り(四十六)良(四十七)善(四十八)の(四十九)性(五十)
の(五十一)少(五十二)し(五十三)あ(五十四)る(五十五)寸(五十六)莫(五十七)し(五十八)人(五十九)種(六十)中(六十一)の(六十二)最(六十三)下(六十四)等(六十五)の(六十六)所(六十七)に(六十八)此(六十九)を(七十)ウ(七十一)ル
テ(七十二)野(七十三)獸(七十四)と(七十五)い(七十六)ふ(七十七)し(七十八)其(七十九)當(八十)然(八十一)あり(八十二)し(八十三)す

「ウ(一)ル(二)人(三)云(四)凡(五)國(六)政(七)あ(八)く(九)交(十)親(十一)の(十二)約(十三)束(十四)あ(十五)く(十六)唯(十七)己(十八)の
性(十九)欲(二十)を(二十一)縱(二十二)る(二十三)は(二十四)す(二十五)り(二十六)の(二十七)い(二十八)ふ(二十九)く(三十)人(三十一)と(三十二)獸(三十三)との(三十四)別(三十五)あり
人(三十六)の(三十七)肉(三十八)を(三十九)食(四十)ふ(四十一)者(四十二)は(四十三)是(四十四)人(四十五)種(四十六)中(四十七)の(四十八)最(四十九)下(五十)等
と(五十一)い(五十二)ふ(五十三)此(五十四)を(五十五)ウ(五十六)ル(五十七)に(五十八)野(五十九)獸(六十)人(六十一)と(六十二)名(六十三)く(六十四)と(六十五)い(六十六)ふ

甲比丹(一)コックク(二)フリドシカ(三)ツブリ(四)イテ(五)ウ(六)及(七)サド(八)イック(九)諸(十)島
の(十一)図(十二)又(十三)ホル(十四)ステル(十五)の(十六)説(十七)も(十八)考(十九)へ(二十)此(二十一)洋(二十二)中(二十三)諸(二十四)島(二十五)の(二十六)人(二十七)種(二十八)を
見(二十九)ら(三十)ふ(三十一)コ(三十二)ウ(三十三)ウ(三十四)の(三十五)此(三十六)を(三十七)野(三十八)獸(三十九)人(四十)と(四十一)い(四十二)ふ(四十三)實(四十四)を(四十五)得(四十六)たり
と(四十七)す(四十八)蓋(四十九)是(五十)人(五十一)種(五十二)中(五十三)の(五十四)最(五十五)下(五十六)と(五十七)す(五十八)る(五十九)あり(六十)總(六十一)て(六十二)此(六十三)諸(六十四)島(六十五)を
カ(六十六)ニ(六十七)バ(六十八)シ(六十九)ト(七十)謂(七十一)ふ(七十二)彼(七十三)を(七十四)ト(七十五)ボ(七十六)ラ(七十七)ト(七十八)ト(七十九)ヒ(八十)ラ(八十一)ト(八十二)カ(八十三)ラ(八十四)ウ(八十五)ル(八十六)メ(八十七)ド(八十八)サ(八十九)ワ(九十)ク(九十一)ニ
ニ(九十二)ラ(九十三)ト(九十四)シ(九十五)サ(九十六)ロ(九十七)モ(九十八)ニ(九十九)ス(一百)サ(一百一)ド(一百二)イ(一百三)ク(一百四)の(一百五)諸(一百六)島(一百七)及(一百八)ロ(一百九)ン(二百)ニ(二百一)シ(二百二)ユ(二百三)カ(二百四)ラ(二百五)ト(二百六)ニ(二百七)ル(二百八)ス(二百九)の

諸島皆此種類あり、ラリドシカフ諸島も甲比丹ブリクト
の事並みテントレカスラアウスの往一以来ハ甚^其近隣ヒテ近
イスレス、テ、ナヒカウウルト相同一あり

ソレイウイワ諸島ハ前の諸島ハ異なり、テ其人柔和
なり、テ少一ハ行儀あり頗人倫ニ近一此大洋中諸
島の内ハて最好とし一言ニ云ハ其人ハ人の性情
を得たり者トす一然とも婦人産一テ自ラ其
生児ト殺スル者曾テ慈悲の心あり唯己ハ怨ミ遂ニ
為メ一テ残忍ニ志スル者ありホルステルヲ謂ハスレラ
イ一人ハ其性理錯ル親殺の名ト云一テ然リト

且んと然ラハ此ソレイウイ人モカニバルの種なりトす
蓋其土地の豊饒ありト以テ其人ト一テ禽^獣の下ト
あり^{なり}ト云ハ放縱檢束あり^しもの

ホルステルホリコイテイウ嶋も食人の種類ありト

コーク及彼ニ伴フ諸子等の行過ヒ一諸島人と總テ
カニバルの種類ト云然とも其後の行旅ハ或ハ然
ラサト云テ予茲ニニカイウ人を記一テ其人種の如此
一種ありト證寸又コーク^ウ司ウカラドニルヲ謂ハス帝ハ
カニバルの類ニ非サトす^るものもあ^らず猶此大洋
中諸島の人も勝リテ甚ハ善性^{あり}ト云フ^{レドシカフ}

人たりも柔和ありて而してホリスルも然りとす然共
ラントカスラアウキスはるるなり此とカニハシの種一其船
を危し導きて一夏を欲せりか、へらウセの不幸を逢ひ
も此等のバルハシの所為に属せりとのあり

命懸け

